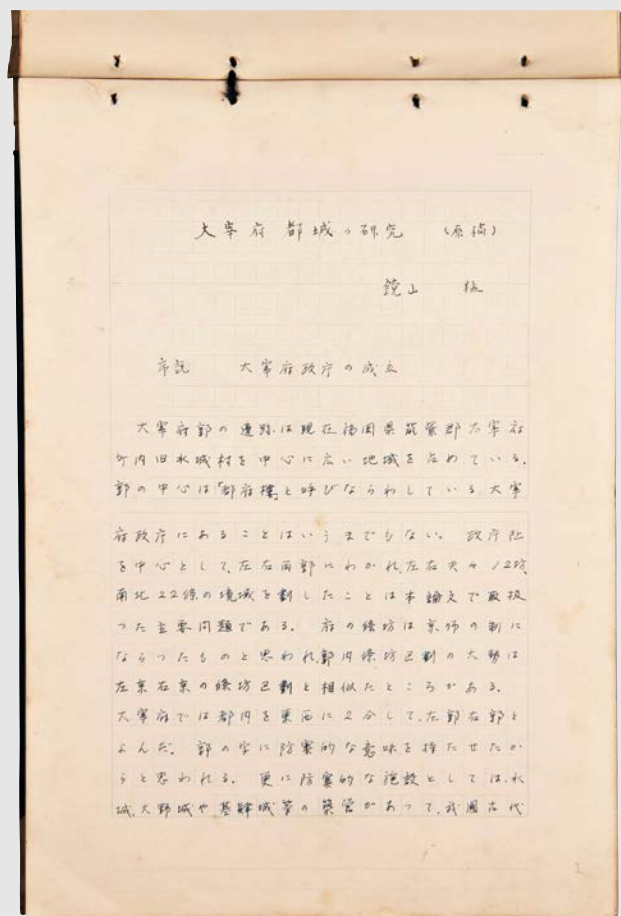


第1部 大宰府研究の歩み



『大宰府都城の研究』草稿
(鏡山猛 自著、九州歴史資料館所蔵)

第1部 大宰府研究の歩み			
第1章	大宰府研究のあゆみと九州国立博物館	松川 博一	11
第2章	大宰府史跡の歴史	杉原 敏之	35
第3章	大宰府の印章	一瀬 智	47

第1部では、大宰府史跡指定100年の節目に際し、史跡としての歴史や学術研究の歩みを振り返る。第1章では、大宰府史跡の保全・活用の学術的基盤となる大宰府学研究の歩みを整理する。第2章では、史跡指定以前の状況も整理しつつ、今日にいたる特別史跡「大宰府跡」の歴史を読み解く。第3章では、「大宰之印」の調査研究、再現文化財製作、展示普及活用を報告し、九州国立博物館のユニバーサル・ミュージアムの新たな取り組みを紹介する。



「大宰之印」（再現文化財、九州国立博物館所蔵）

第1章

大宰府研究のあゆみと九州国立博物館

松川 博一

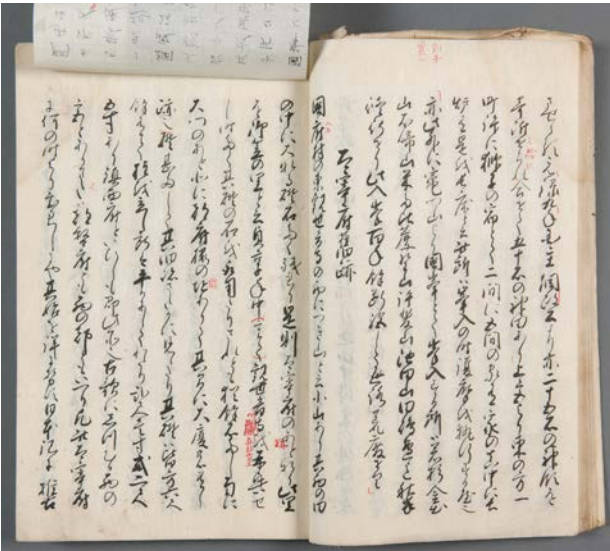
はじめに

大宰府研究は、江戸時代、福岡藩による『筑前国続風土記』などの地誌の編纂や名所旧跡の顕彰に端を発する（画像1）。史料や現地調査にもとづく実証的な研究は、史跡の価値づけを可能にし、都府楼跡（大宰府跡）や太宰府天満宮をはじめとした古代大宰府への関心を広く喚起することになった。その結果、福岡藩による史跡の保護対策が講じられるとともに、「さいふまいり」の名所旧跡として多くの人びとが訪れた。江戸時代の大宰府研究のテーマは、ひとつは古代最大の地方官司である大宰府をめぐる研究、もうひとつは太宰府天満宮とその祭神である菅原道真についての研究である。いずれも大宰府の歴史と文化を探究する上で欠くことができない課題であり、ここに「大宰府学」の萌芽をみることができる。

川添昭二は「大宰府学とは何か」という問いに対して「大宰府を研究対象とする学問体系」と端的に述べた上で、対象の時代については九州の内政と日本の対外関係を扱うという大宰府の役割が消滅することになる南北朝時代までをひとつの画期と捉えている。そして、「大宰府学」を推進する上では「東アジアの中の日本—大宰府を念頭に置く」ことの必要性を説いている（川添1995）。さらに「太宰府学」については、「アジアの視点から太宰府—九州や日本を見つめ直し、太宰府に生かされ太宰府に生きる意味を探究する総合科学としての地域学」と定義し、「太宰府の文化的主体性の更なる強化が緊要である」と述べている（川添2007・2009）。

「大宰府」と「太宰府」の表記の使い分けについては、今日、一般に古代の役所やその遺跡を指す場合は「大宰府」、行政地名の場合は「太宰府」を用いるとされている。これは昭和30年代末頃、鏡山猛により提唱されたものである（重松2007）。「太宰府学」は、太宰府市という地域そのものに立脚点を置いた「太宰府研究」という点では、この使い分けに呼応している。ただし、川添がいう「太宰府学」は、単なる「大宰府学」の対概念ではなく、時代や学問分野のひろがりに加えて、「大宰府学」をも包括した地域学を意味していると捉えることもできる。

倉住靖彦は、「大宰府」の語義について、①律令官司としての大宰府（大宰府政庁）、②大宰府政庁を含めた街区としての大宰府（大宰府条坊）、③水城・大野城を含めた「都城」としての大宰府（「大宰府都城」）、④大宰府が総管する西海道全域（大宰府管内）と整理されている（倉住1975）。それを踏まえれば、「大宰府学」は、官司としての大宰府だけではなく、都市としての大宰府、さらに西海道全域を対象とする「九州学」ともいえる広域研究としての側面も有している。また、川添が指摘するように、大宰府の役割に着目すれば、アジアの中の大宰府という視点、つまり対外関係史や文化交流史も重要なテーマである。加えて江戸時代以来、大宰府研究のもうひとつの柱である菅原道真や太宰府天満宮を中心とし



画像1 筑前国続風土記（九州歴史資料館所蔵）

た天神信仰の研究も欠くことができないものである。

本稿で対象とするのは、古代の大宰府を主な対象とした「大宰府学」である。ただし、古代の大宰府はあくまで基点であり、そこから波及あるいは派生する研究対象は地域的・時間的なひろがりを持っている。地域の範囲については大宰府管内である九州、あわせて対外交流の窓口という点でアジアへひろがり、時間の範囲についてはその前史および大宰府の役割が完全に消滅すると考えられている南北朝時代までが想定される。川添は「大宰府」の終末を南北朝時代の「大宰府征西府」までとし、その権威は大内義隆の大宰大弐任官や大府宣の発給の例を挙げこの頃まで効力を有していたとしている（川添1994）。さらに文化史的な側面を加えると天神信仰はもとより文学・伝承・伝統芸能・祭礼なども対象となり、分野の拡大に連動してさらなる時間的および地域的なひろがりを持つことになる。

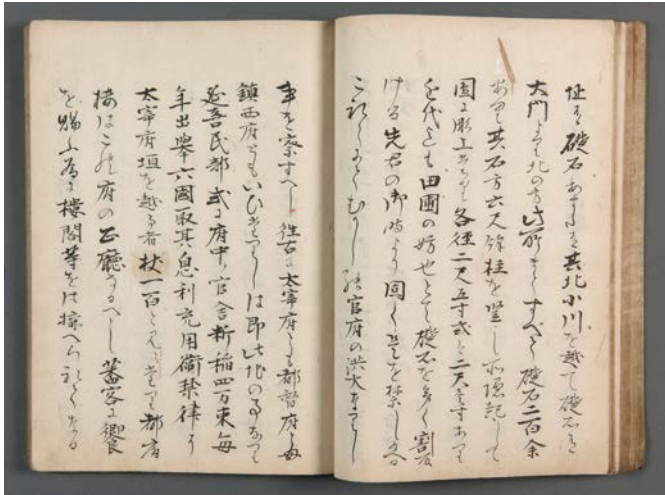
「大宰府学研究」については、これらの大宰府研究の内容に加えて、その研究史や学問の体系および方法論、博物館活動をはじめとした社会への普及・影響にいたるまで扱う必要がある。本稿では「大宰府学」および「大宰府学研究」の基点となる古代の大宰府を対象とした大宰府研究のあゆみを中心として、特に九州国立博物館とのかかわりを意識しながらたどってみることにする。なお、研究者等の人名については本来敬称や所属・肩書きを付すべきところではあるが、基本的に省略させて頂いていることをご容赦いただきたい。

1. 「大宰府学」の聖地

九州国立博物館は天神の杜に抱かれた「大宰府学」の聖地に建っている。江戸時代から現代にいたるまで一貫して大宰府研究の拠点であり続けたのは太宰府天満宮である。延宝4年（1676）、太宰府天満宮の好学の社僧であった検校坊快鎮は、文学を志す者のために広く全国から典籍を収集して御文庫を開設している。古代において大宰府管内の郡司子弟が集って諸学を習得した大宰府学校院になったものであり、太宰府は学問の府であるべきとの矜持に基づいたものと考えられる。実際、これから紹介する「大宰府学」の先学もその恩恵に預かっていることが御文庫の庫書貸与人名簿から確認することができる（筑紫1969）。

それに共鳴した福岡藩の儒学者貝原益軒は、菅原道真の生涯と太宰府天満宮の歴史をまとめた『太宰府天満宮故実』を著わし、貞享3年（1686）に御文庫へ献納している。本著は一般的な寺社縁起と異なり、諸伝承を洗い落としあくまで史実に基づいて述作しようとする姿勢が貫かれたものである。上巻は道真の関係史料に基づいた伝記、下巻は太宰府天満宮の歴史や行事を叙述した社記となっている（川添2004）。本著は本格的な菅原道真・太宰府天満宮研究のはじまりを告げるものである。

律令官司としての大宰府の研究についても貝原益軒が編纂した元禄16年（1703）成立の地誌『筑前国続風土記』を端緒とし、それを本編として加藤一純・鷹取周成等の『筑前国続風土記附録』や青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』が編まれ、より多くの史料の収集と実地調査に基づく実証的な研究により内容の深化が図られている（画像2）。特に那津官家を大宰府の起源とする種信の見解は今日もなお大宰府成立論において継承されている。あわせて福岡藩による礎石調査の成果に基づいた都府楼跡の建物配置の分析も的確であり、その後の調査研究の指針となるばかり



画像2 筑前国続風土記拾遺（九州歴史資料館所蔵）

か、のちの発掘調査の成果と多くの符合をみせている（高倉1996）。これらの福岡藩による優れた修史事業は、その後の大宰府研究の礎となっている。そして、もうひとつ注目すべきこととして、天明年間（1781～88）には、第9代藩主の黒田斉隆が実効性のある政策として都府楼跡の礎石の保護を命じ、寛政5年（1793）に礎石調査を行っていることである（一瀬2009）。このように18世紀後半には、大宰府史跡の調査・研究・保存が実行されていることになる。

その後、筑前三大地誌のほかに、青柳種信の『太宰府志（考）』や上野勝従の『太宰府考』、伊藤常足の『太宰府徴』、竹田定簡の『太宰府備考』など、古代大宰府や大宰府跡を専論したものも著された。これらの一連の専著は、都府楼跡の荒廃を目の当たりにした憂いから、その歴史的な価値を明らかにして史跡を顕彰しようとする意図により叙述されたものである（重松2004・2008）。『太宰府考』と『太宰府徴』の両書は、明治30年代に高原謙次郎と江島茂逸が『太宰府史鑑』を編録する際、大宰府研究の基本文献として参照されている。また、伊藤常足がまとめた『太宰管内志』は益軒の編集方針や文体にならって、大宰府管内である九国二島を国郡別に編纂した地誌であり、まさに九州研究の濫觴といえる大著である。本書はのちに日本歴史地理学会が原史料と照合し校訂を加えた上で明治41～43年に刊行されている。明治時代の大宰府研究が益軒や種信をはじめとした江戸時代の儒学者や国学者の業績の上に成り立っていることがわかる。そのことは明治時代以降、大宰府政庁の正殿跡に建てられた「太宰府碑」と「太宰府址碑」の碑文が亀井南冥や竹田定簡の文案を基にしていることからもうかがえる。そして、もうひとつ重要なことは、いずれの石碑も大宰府の沿革を記す際に菅原道真の事績を取り上げていることである。

明治時代における大宰府研究の名編といえば、高原謙次郎と江島茂逸が編述した『太宰府史鑑』が挙げられる。高原は御笠郡の大庄屋、江島は旧福岡藩士であり、ともに郷土史家である。明治35年（1902）の太宰府天満宮の1000年の御神忌にあわせて、「太宰府史」編集の拳が起こり、その祭典準備のために設立された菅公会から発刊された。本書の構成は、江戸時代の大宰府研究を継承・発展させた形で、上編は官司として大宰府の沿革、中編は菅原道真の生涯、下編は太宰府と太宰府天満宮の歴史および名所旧跡について記している。当時、「太宰府史」といえば、大宰府と菅原道真のふたつの主題をもって叙述されるべきとの認識だったことがわかる。

大正時代に入り、大宰府研究を牽引したのは、高原謙次郎も主力メンバーの一人であった筑紫史談会である（画像3）。大正2年（1913）に成立した筑紫史談会は、黒田家別邸と太宰府神社文書館に拠点を置き、主に古代の大宰府研究と幕末維新期の筑前郷土史研究に取り組み、その成果を機関誌『筑紫史談』に発表する活動を行った。筑紫史談会の名称は筑紫郡の史談会という意味合いをもっていたが、さらに九州の古称である「筑紫」の意味も込められていたと想定される（日比野2004）。会員には郷土史家だけではなく、旧藩主をはじめ



画像3 大正末年頃の大宰府政庁跡

として福岡県ゆかりの華族や政財界の有力者、文化人、教育者、軍人が名を列ね、太宰府関係では太宰府町の古川勝隆町長や水城村の西山弥一郎村長、太宰府神社の西高辻信稚官司、観世音寺の石田琳樹住職、絵師の吉岡拝山の名がみえる。大宰府研究という点で注目されるのは、幹事長である武谷水城の大宰府史跡の研究であり、大宰府政庁はもとより水城・大野城・基肄城・観世音寺・筑前国分寺・国分瓦窯などの史跡や菅原道真など、多岐にわたって実証的な研究を展開している。「筑紫」＝古代九州を対象とした広域研究としては、野々口永二郎・久保山善映・藤井甚太郎などの面々が駅路についての論文を多く発表している。ちなみに藤井は『歴史と地理』や『考古学雑誌』の方に多くの古代史の論文を

発表しており、神籠石や大野城・基肆城・三野城、防人に関する一連の論文が確認できる。大正時代以降の大宰府研究を担った筑紫史談会の活動は昭和20年の敗戦とともに終わりを迎え、その間に『筑紫史談』は90集を数えることになる。

戦後の大宰府研究の出発点となったのは、昭和27年（1952）、太宰府天満宮が1050年の御神忌大祭にあわせて発刊した『太宰府小史』である。本書は太宰府について専論した戦後最初の学術書であり、「上代の太宰府」を北海道大学教授（前九州帝国大学教授）の竹岡勝也、「中世の太宰府」を九州大学名誉教授の長沼賢海、「史伝と史話」を郷土史家の橋詰武生がそれぞれ執筆した大宰府の通史となっている。竹岡は、古代の大宰府について、国防線の中心として枢要の地位を占め、外交上の要衝であり、九国三島の総監府的な立場であったとし、さらに藤原京や平城京と並び称せられる程の規模を持つ一大都城をなしていたと著述している。ここには大宰府がもつ三つの重要な機能が的確に示されており、あわせて鏡山猛の戦前の大宰府条坊研究の成果「太宰府の遺跡と條坊」（鏡山1937）をうけて、国防都市や政治都市としての大宰府についても言及している。文末の大宰府関係の「略年代記」をみると、外交関係記事が手厚く取り上げられており、特に大宰府がもつ外交機能への関心の高さがうかがえる。また、令和への改元により「梅花の宴」の舞台として一躍脚光を浴びた坂本八幡宮の周辺を大宰帥大伴旅人の邸宅の有力な候補地とする説を提唱したのは竹岡であり、本書がその嚆矢となる。著者である竹岡・長沼は太宰府天満宮の西高辻信貞宮司にとって九州帝国大学時代の恩師である。信貞宮司は後年、『日本経済新聞』の連載記事の中で、竹岡から「大宰府がアジアとの接点にあたる重要な地点であり、外交、防衛の重要な役割を担い、かつ九州の総督府であったこと」を学んだと回顧し、みずからも「アジアの文化の接点としての意味をふまえて、大宰府の歴史的解釈の研究を続けていきたい」と大宰府研究への意気込みを述べている（西高辻1988）。

江戸時代から戦前までの大宰府研究をみてくると、その主題が古代の大宰府とその史跡についての研究と、太宰府天満宮と祭神である菅原道真を対象とした研究のふたつに収斂され、その研究の拠点が常に太宰府天満宮に置かれていたことがわかる。言い換えれば、太宰府天満宮は「大宰府学」の聖地であり続けたのである。

もうひとつ太宰府天満宮を「大宰府学」の聖地と呼ぶにふさわしい理由がある。それは、大宰府研究に取り組んだ先学の多くが菅原道真公を敬仰していたということである。貝原益軒は儒学者として菅公を尊崇し、神儒一致の立場から菅公の威徳を顕彰しようとした。その集大成といえるものが『天神行状』『菅神故実』を経て完成した『太宰府天満宮故実』である（川添2004）。そして、『筑前国続風土記』においても太宰府天満宮の沿革と菅公ゆかりの伝承について多くの紙幅を費やしている。その姿勢は、その後の加藤一純・鷹取周成等の『附録』や青柳種信の『拾遺』にも継承されている。その背景には、黒田如水および長政以来の藩主黒田家による太宰府天満宮への篤い信仰があった。

明治時代以降においては、大宰府研究の画期となる出版が太宰府天満宮の御神忌に合わせて行われている。すでにみてきたように、明治35年（1902）の1000年の御神忌には高原謙次郎・江島茂逸の編著による『太宰府史鑑』、昭和27年（1952）の1050年の御神忌には竹岡勝也・長沼賢海・橋詰武生の分担執筆による『太宰府小史』が企画・出版されている。竹岡は戦後の一時期宮司邸に暮らし、長沼は太宰府天満宮の近くに住み氏子であったこともあり、大宰府史跡や太宰府天満宮への愛着は深かった。長沼は九州帝国大学着任前より平安時代から江戸時代にいたる天神信仰史についての研究を成していた（長沼1919）。その上で「菅神を文道の大祖とあがめるのは、ただ信仰の上ばかりではない。歴史的にも同様である」と述べている。本書には大宰府研究への熱い思いとともに、菅公への敬慕の念が込められている。長沼が晩年の大業である「太宰府学」を「虎に翼」の体制で成し得たのは、考古学の分野では鏡山猛、歴史の分野では西高辻信貞宮司の二人の弟子の存在があったからだと同門の檜垣元吉は述懐している（井上忠・渡辺正気1993）。

昭和26年以来、大宰府および太宰府天満宮の史料集の編纂に心血を注いだ竹内理三は、信貞宮司が抱

く学問の神を祭神とする太宰府天満宮の使命として学問に貢献したいという熱意と太宰府を想う心に打たれて、「学問の神様のためにこの仕事をやらせていただくのだ」という気持ちから一大事業に取り組んだという（森1988）。昭和39年から始まる『大宰府・太宰府天満宮史料』の刊行は、来たる昭和52年の1075年御神忌の記念事業の一環として企画された継承事業であった（西高辻1964）。この編纂事業は竹内から九州大学の川添昭二へ引き継がれ、1100年の御神忌の翌年にあたる平成15年（2003）に本編17巻が完成し、さらに吉原弘道が編纂者として加わり同21年に補遺・附録を含む全19巻が完結した。川添はあくまでこれは「将来の『太宰府天満宮史』編纂のための不可欠の基礎的作業」としている（川添昭二・吉原弘道2006）。実は『大宰府・太宰府天満宮史料』の編纂事業には前史がある。昭和8年のこと、西高辻信稚宮司は来たる昭和27年の1050年の御神忌の記念事業として体系的な天満宮史料の出版を企画し、東京帝国大学の宮地直一にその編纂を依頼してほぼ完成の域に達していたが、戦災のためにすべての稿本が灰燼に帰してしまい、不幸にも発刊することができなかった（西高辻1964）。本史料集の完成は、76年間にわたり信稚・信貞・信良と受け継がれた宮司三代の悲願だったことがわかる。本史料集が大宰府研究や菅原道真および天神信仰研究にとって有益であるのはもちろんのこと、今日まで古代・中世の九州研究の進展に大きく寄与してきたことはあらためて申すまでもない。

1075年の御神忌に向けては、昭和43年に明治百年記念事業として「天満宮信仰と太宰府文化への貢献」を図るべく太宰府天満宮文化研究所が開設され、その最初の事業として長沼賢海の『邪馬台と大宰府』が発刊された。大宰府研究の後継者ともいえる鏡山猛は、本書について多年にわたる研究の成果であるとともに数々の新見解も見られ「今後末永く研究の貴重な指針となる」大著と評している（鏡山1969）。続いて同50年には御神忌記念論文集『菅原道真と太宰府天満宮』が出版され、その趣旨に賛同した坂本太郎・竹内理三・鏡山猛・田村圓澄・川添昭二をはじめ、多くの研究者から菅原道真や天神信仰、太宰府天満宮および大宰府を主題とした高論が寄せられた。その翌年には「大宰府研究の成果と課題」と題するシンポジウムが開催され、竹内理三・岸俊男・鏡山猛・田村圓澄・平野邦雄・岡崎敬・小田富士雄・渡辺正気・石松好雄・亀井明德・澤村仁など、県内外から古代史・考古学・建築史の研究者が集い、その後の大宰府研究に大きな示唆を与えるものとなった。

つづく1100年の御神忌の記念事業としては、味酒安則・村田真理が菅公の生涯をわかりやすく著した『新菅家御伝』と、森弘子・宮崎由季等が菅公に敬慕の念を寄せた先人達について記した『天神さまと二十五人―菅原道真公をめぐる人びと―』が平成14年に文化研究所編集で発行された。その3年後には貝原益軒を含めた平安時代から現代にいたる知識人の天神信仰についてまとめた真壁俊信の大著『天神信仰と先哲』が刊行されている。また、御神忌にあわせて和漢比較文学会が太宰府天満宮において「菅原道真の文学世界」をテーマにシンポジウムを開催し、翌年に同学会から『菅原道真論集』（勉誠出版）を刊行している。菅原道真と天神信仰を総合的に扱った論文集としては、1075年御神忌の『菅原道真と太宰府天満宮』に次ぐものである。太宰府天満宮の御神忌ごとに大宰府研究の進展がみられ、その成果の普及が行われていることがわかる。

太宰府天満宮が主体の文化財総合調査としては、大宰府鎮護の霊峰である宝満山の調査がある。昭和35年に長沼賢海・干潟龍祥・西高辻信貞宮司を发起人として宝満山文化総合調査会が結成され調査が行われた。その考古学的成果は昭和57年にその後の成果を含めて小田富士雄編『宝満山の地宝』として財団法人太宰府顕彰会・太宰府天満宮文化研究所から発刊され、その翌年にはその拾遺として小田富士雄・武末純一編『太宰府・宝満山の初期祭祀』が出された。さらにその翌年には小西信二が実地踏査と編集をした『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書』が刊行されている。また、宝満山の通史としては、昭和55年に中野幡能編『筑前国宝満山信仰史の研究』が文化研究所・名著出版から刊行、それに先立って昭和50年に森弘子『宝満山歴史散歩』が葦書房より出版されている。そして平成20年には宝満山研究の集大成である森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』が財団法人太宰府顕彰会から刊行されている。宝満山は大宰府研究の重要なテーマのひとつとして、今も研究の深化が図られている。

財団法人太宰府顕彰会（のちの公益財団法人太宰府顕彰会）は、昭和51年に「太宰府天満宮に係る文化財の調査研究及び文化財保護のための助成を行い、また古代日本とアジア大陸とのまさに接点として栄えた筑紫大宰府の歴史文化遺産等について調査研究する」ことで「学術文化の向上に寄与すること」を目的として太宰府天満宮に設立された団体である。そして、今日まで太宰府地域の歴史と太宰府天満宮を中心とした天神信仰に係る文化遺産の調査研究及び保護などの事業を行ってきた。ここにも設立者である信貞宮司の筑紫・大宰府に対する歴史認識と大宰府研究の発展を願う真心がよく表れている。

太宰府天満宮は、常に大宰府研究の拠点として重要な役割を担うとともに、その研究を志す者にとって心の拠り所であり続けてきたことがわかる。古代の大宰府と太宰府天満宮を対象とした大宰府研究の発展は、九州国立博物館の実現とならび、太宰府天満宮の歴代宮司の願いであった。実際、その思いの表れとして、同宮の御神忌が大宰府研究のあゆみにおいて大きな画期となってきた。その意味で太宰府天満宮は大宰府研究の「聖地」といっても過言ではない。その天神の杜の中に新たな大宰府研究の拠点のひとつとして九州国立博物館は誕生することになる。

2. 大宰府史跡と大宰府研究

戦前の大宰府研究の成果として取り上げるべきこととして、中学修猷館の池上年の「都府楼址の研究」（池上1918）と、九州大学の中山平次郎による大宰府および鴻臚館についての一連の研究がある。池上は生徒とともに測量をして大宰府史跡の地形図を作成した上で礎石の実測を行い、政庁の建物配置の復元を試みようとした。大宰府政庁の遺構図を考古学的に捉えた研究の嚆矢といえる。中山は発掘を行わず、徹底した現地踏査と表面採集の資料から遺物と遺跡の関係を明らかにするという方法を採用した。採集の古瓦と『万葉集』の和歌の検討から鴻臚館の位置を福岡城内に推定したほか、採集した大宰府の古瓦や蔵司の遺物についての研究も行っている（岩永2016年、九州国立博物館編2018年）。蔵司については採集した挂甲小札や鉄鏃から兵器工房が焼失したのちに調庸物を収納する倉庫が建てられたとする仮説を提示している。

福岡県としての戦前の文化財調査成果としては、史蹟・天然記念物に関する思想の普及と愛護保存の必要性の宣伝を目的として、大正14年から昭和19年までの間に福岡県が発刊した『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1～15輯がある。調査・編集は福岡県内務部学務課（のちに学務部社寺兵事課）の囑託だった島田寅次郎・川上市太郎の両名が行い、長沼賢海・竹岡勝也・中山平次郎・玉泉大梁・鏡山猛・伊東尾四郎等が調査委員となっている。大宰府に関するものとしては、「太宰府趾の礎石」「大野城趾」「大野城及四王寺遺蹟」「水城の大樋の調査」「昭和七年発見四王寺経筒写経と四王瓦」「太宰府出土埴埴に就て」「御笠団印と遠賀団印」などの調査報告が掲載されている。大正15年刊行の第2輯に収められている調査報告「太宰府趾の礎石」では大宰府政庁跡の現況写真と全体図のほか、正殿跡とその礎石の実測図、さらに江戸時代の礎石改の略図を掲載し建物別の礎石数の推移を表で示した上で、大宰府の沿革や職制についても言及している。この中では、蔵司の丘陵の西から銅鉄の屑が多く出土することから匠司もしくは修理器仗所の存在を想定している。また、「水城の大樋の調査」は、昭和5年に長沼・鏡山等が水城東門跡付近の井戸工事で偶然発見された木樋を発掘調査した報告であり、水城全体の断面図と木樋の実測図が付されている。

戦後の大宰府研究は、昭和26年（1951）、九州大学九州文化総合研究所（のちの九州文化史研究所）、福岡県教育庁文化課（のちの文化財保護課）、文部省文化財保護委員会（のちの文化庁）の三者の協力により設置された「大宰府の都制と文化調査会」によって推し進められた。調査組織は考古班・美術班・文献班等からなり、九州大学の教官を中心に編成された。考古班は同26年に大宰府史跡の測量を行って調査の基礎資料となる地形実測図を作成した上で、翌年に九州文化総合研究所と福岡県教育委員会の共同調査として、九州大学の鏡山猛を中心に熊本女子大学の乙益重隆や別府女子大学の賀川光夫等

が参加し、府の南館跡とされる榎社境内を皮切りに、観世音寺とその子院跡とされる推定金光寺跡、松倉瓦窯跡などの発掘調査が実施された（鏡山1957、森1988、石松2004）。これが大宰府史跡を対象とした発掘調査のはじまりである。それらの成果は昭和43年発刊の鏡山猛の『大宰府都城の研究』として結実することになる。本書では、文献史料と実地調査に基づいた研究により、大宰府政庁や観世音寺・筑前国分寺および大宰府条坊、さらに水城や大野城・基肄城を含めた「大宰府都城」の全体像が提示されている。鏡山は昭和43年からはじまる大宰府史跡の本格的な発掘調査を前にして、「既往調査の結果をまとめておくのは無意味ではあるまい」と述べている（鏡山1968）。鏡山が戦前から調査してきた大宰府と朝鮮式山城に関わる「研究の総決算」であり、その研究成果をベースにその後の発掘調査が進められてきたことを考えれば「大宰府考古学の起点」と位置づけられる一書である（岡崎敬・渡辺正気1980・小田富士雄1984）。美術班については、九州大学の谷口鉄雄を中心に観世音寺の仏像の計測と写真撮影が行われた。その時に写真家片山摂三が撮影した仏像写真のガラス乾板は令和元年に九州歴史資料館が寄贈を受けて所蔵している。

文献班は大宰府に関する文献史料の収集・整理を担当した。必須となる太宰府天満宮の古文書の調査は、九州大学の竹内理三を中心に同大学の箭内健次・日野開三郎・檜垣元吉、東京都立大学の森克己、九州工業大学の平野邦雄、福岡学芸大学の波多野暁三・片山直義等、多くの歴史学者が太宰府天満宮の社務所に寝泊まりして夏休み中の10日間ずつ4・5年間にわたって合宿調査が行われた。太宰府天満宮は調査のための経費を負担し、調査員の食事から宿泊までの万端の世話をしたという（森1988）。竹内は大宰府関連の文献史料の集成に努め、昭和29年から35年までの間に『大宰府史料』上世編10冊をはじめ油印版の史料集全26冊を順次刊行している。編集の体裁は『大日本史料』にならい、その範囲は宣化天皇元年（536）の那津官家の設置から慶長4年（1599）までの1063年間に及ぶ。そして、これを基として昭和39年以降、『大宰府・太宰府天満宮史料』が公刊され、古代大宰府研究を行う上での基礎史料が完備されることになる。竹内はこの編纂の過程でその後の大宰府研究の指針となるべき核心を捉えた論文を発表している。それは大宰府の機構研究の出発点となった「大宰府政所考」（『史淵』第71輯、1956年）、そしてそれを核として大宰府全体を総括した「大宰府と大陸」（『古代東アジアと九州』平凡社、1973年）、観世音寺史研究の基礎を作った「筑前観世音寺史―東大寺末寺になるまで―」（『南都仏教』2号、1955年）の三部作である（川添1997年）。特に「大宰府政所考」では、所司に関わる史料を博搜し検討した上で、学校院・兵馬所（兵馬司）・蕃客所・主厨司・主船司・匠司・修理器仗所・防人司・警固所・大野城司・蔵司・税司・大帳所・公文所・薬司・貢上染物所・作紙所・貢物所・政所の十九の所司の存在を明らかにし、このなかで政所が中央の太政官庁的地位を占めたとしている。今なお大宰府の官制についての通説的な理解となっている。

昭和39年に『大宰府・太宰府天満宮史料』が公刊される以前の大宰府研究のあゆみについては、九州史学研究会古代史研究会（のちの古代史部会）の卯野木盈二・長洋一・岡藤良敬が「大宰府研究の成果と課題」として文献史学の成果を中心にまとめている（古代史研究会1963）。また、同年に竹内理三も『歴史評論』において、「九州の地域史研究」として7回連載で大宰府研究を振り返っている（竹内1963・64）。それらで取り上げているテーマを要約すると、①大宰府成立論（那津官家・筑紫大宰）、②大宰府の機構についての研究（諸司諸所・府官）、③大宰府と西海道をめぐる研究（戸籍・調庸制・公営田制・隼人・駅路・風土記）、④大宰府軍制の研究（防人・軍団・藤原広嗣の乱）、⑤対外関係史の研究（鴻臚館・日宋貿易）、⑥大宰府都城（条坊）と古代山城の研究、⑦大宰府管内の寺社研究（観世音寺・竈門山寺・香椎宮・宇佐神宮・宗像大社・荘園）、⑧菅原道真と天神信仰の研究（安楽寺・天神縁起）に大別できる。今日につながる大宰府研究の主要テーマがこの時点で出揃っていることがわかる。その代表的な研究成果を挙げるとすれば、①は大宰府の成立過程を論じた波多野暁三「大宰府淵源考―筑紫大宰の性格について―」（『日本歴史』第72号、1954年）、②は前掲の竹内理三の研究や石井進「大宰府機構の変質と鎮西奉行の成立」（『史学雑誌』68―1、1959年）、③は村井康彦「公営田と調庸制―貢納制から交易制へ―」

（『史林』44－5、1961年）をはじめとした大宰府の財政的機能や管内の収取負担体系の変化に関する研究のほか、大宝二年西海道戸籍を使った社会構成の解明や隼人・官道・風土記を対象とした多方面の研究、④は大宰府の独立性を論じた丸山二郎の「藤原広嗣の乱と鎮西府」（『歴史教育』3－5、1955年）、⑤は大宰府貿易の実態に迫った森克己の『日宋貿易の研究』（国立書院、1948年）や『日宋文化交流の諸問題』（刀江書院、1950年）、⑥はのちに『大宰府都城の研究』に集大成される鏡山猛の大宰府都城に関する一連の研究、⑦は小田富士雄の古瓦・文献史料の検討による観世音寺・竈門山寺・安楽寺・宇佐弥勒寺等の古代寺院研究とそれに関わる鴻臚館式古瓦・老司式古瓦・都府楼式鬼瓦などの大宰府系古瓦の研究、宮地直一・中野幡能等の八幡信仰の研究、⑧は伝記の決定版といえる坂本太郎の人物叢書『菅原道真』（吉川弘文館、1962年）がある。大宰府研究の課題としては、大宰府の独自性・特殊性や大宰府と西海道諸国との関係、隼人の問題、大宰府と寺社との関係、大宰府の機構・機能の変質過程について更なる追究が必要であるとしている。この後に発表された論文として、平野邦雄「大宰府の徴税機構」（『律令国家と貴族社会』吉川弘文館、1969年）は大宰府を中央と国の中間機関として独自の政治的機能と、九国二島を総管する大幅に独立した行政機能を有していたと述べた上で、徴税機構の検討を通して中央政府・大宰府・西海道諸国の関係を論じ、大宰府の財政の特質を明らかにしている。また、大宰府による西海道支配は一様ではなく、三前三後の六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）と三国二島（日向・大隅・薩摩・壱岐・対馬）に分かれるとしている。現在も古代史部会では古代の大宰府や九州を対象とした研究発表が度々行われ、その成果となる論文が学会誌『九州史学』に掲載されている。

大宰府研究において次なる画期となるのは、昭和43年（1968）の福岡県教育委員会による大宰府政庁跡の発掘調査の開始である（画像4）。この年は大宰府研究と九州国立博物館にとって重要な出来事が目白押しである。2月に大宰府史跡の発掘調査事業が発表されると、4月に太宰府天満宮に文化研究所を設置、国立博物館の誘致に向けて国立九州博物館設置期成会の発会式、6月に鏡山猛の『大宰府都城の研究』の発刊、7月に大宰府史跡発掘調査指導委員会が発足し第1回委員会を太宰府天満宮で開催される（画像5）。第1回委員会は、竹内理三委員長（早稲田大学教授・古代史）と鏡山猛副委員長（九州大学教授・考古学）をはじめとして、坂本太郎（東京大学名誉教授・古代史）・井上光貞（東京大学教授・古代史）・岸俊男（京都大学教授・古代史）・井上辰雄（熊本大学助教授・古代史）・岡崎敬（九州大学助教授・考古学）・坪井清足（奈良国立文化財研究所・考古学）・浅野清（大阪市立大学教授・建築学）・太田静六委員（九州大学教授・建築学）と小田富士雄幹事（九州大学助手・考古学）という体制で開催された。同月には太宰府町議会の史跡対策特別委員会も発足、9月に長沼賢海の『邪馬台と大宰府』の発刊、10月に大宰府史跡発掘調査の鍬入れ式、11月に大宰府政庁跡の発掘調査を開始する（太宰府市史編集委員会編『太宰府市史 年表編』太宰府



画像4 昭和40年代の大宰府政庁跡周辺



画像5 大宰府史跡発掘調査指導委員会（1969年）

市、2004年）（画像6）。また、9月には長年平城宮跡の発掘調査に携わってきた藤井功が奈良国立文化財研究所から福岡県教育委員会に着任し、大宰府史跡の発掘調査を指揮するとともに史跡指定拡張協議や国立博物館誘致でも大きな役割を担った。昭和43年にはそれまでの「大宰府研究」の総括ともいえる長沼・鏡山による専著が出版されるとともに、大宰府の調査研究体制が整備され、満を持して大宰府中枢の発掘調査が開始されたことになる。発掘調査は「宅地の開発か、史跡の保存か」という史跡指定の是非をめぐる激しいせめぎあいの最中で行われたが、その発掘調査の成果により広く大宰府史跡の重要性への理解と支持を得ることになり、太宰府における史跡保存問題は次第に好転し、最終的に「保存」への道を選ぶに至った（井上2004）。九州国立博物館の三輪嘉六初代館長は、「文化財は保存だけでなく活用への道があって初めて文化財の保護が整うという理念」からすれば、その公開活用の一翼を担うべくして太宰府市にできた九州国立博物館であるからこそ大宰府史跡関連の展示を展開する必要があると説き、「大宰府の保存問題の延長線上に九博の存在がある」と述べている（三輪2014）。

大宰府政庁跡の発掘調査の成果として特筆すべきことは、大宰府政庁の三期にわたる建物の変遷が確認されたことである（画像7）。中門・南門跡出土の須恵器の鎮壇具や軒瓦から、Ⅰ期政庁は7世紀後半の掘立柱建物、Ⅱ期は8世紀初頭の瓦葺きの礎石建物、Ⅲ期は10世紀後半頃に同位置で建て替えられた礎石建物であることがわかった。さらにⅡ・Ⅲ期の政庁は朝堂院形式の建物配置を採り、その規模は東西約110.7m、南北約211mであることが確認できた。Ⅱ期の政庁は正殿と東西各二棟の脇殿、後殿、南門、中門、回廊、築地で構成され、Ⅲ期政庁はさらに後殿の後方東西に塔もしくは倉庫とみられる礎石建物が加わる。Ⅱ期の政庁の東北隅では一棟の掘立柱建物がみつき、その北側の土坑から木簡とその削り屑が大量に出土した。さらに政庁前面の不丁・日吉地区の調査により、礎石建物や掘立柱建物が確認され、政庁の南に官衙域「府庁域」がひろがっていることが確実になった（石松2004）。そして、不丁地区からは西海道の国郡名を記した付札木簡や官司・官職名を記した墨書土器が出土した。あわせて水城跡・大野城跡や観世音寺・筑前国分寺跡などの発掘調査も福岡県教育委員会や九州歴史資料館によって行われ、「官衙」および「都城」としての大宰府の姿が次第に明らかにされていった。

それらの成果は、藤井功・亀井明德『西都大宰府』（NHKブックス、NHK出版、1977年）や鏡山猛『大宰府遺跡』（考古学ライブラリー、ニュー・サイエンス社、1979年）により広く紹介され、それを受けて文献史学の立場から倉住靖彦の『大宰府』（歴史新書、教育社、1979年）が著された。これらの一般書により、古代大宰府の重要性は広く知られ、大宰府史跡への関心も高まることになる。

『大宰府・太宰府天満宮史料』の発刊と大宰府史跡の発掘調査による大宰府研究の機運の盛り上がりを受けて、昭和48年（1973）、小田富士雄・岡崎敬・岡藤良敬・亀井明德・川添昭二・倉住靖彦・田村



画像6 大宰府史跡発掘調査鍬入れ式（1968年）



画像7 大宰府政庁南門跡発掘調査（大宰府史跡1次）

圓澄・藤井功・正木喜三郎・渡辺正気を準備委員とする大宰府研究会が発足された。その趣旨は「考古学、古代史、中世史専攻のもの達で大宰府研究の一つの会を組織して」「大宰府的世界の研究を大きく前進させたい」というものである（大宰府研究会1973）。この「大宰府的世界」とは単なる日本の中の一地方ではなく日本歴史の中に形成している重要な歴史的世界であり、国家という完結した世界ではなく、一方ではたえず中央権力との関係において、一方では諸外国との交渉の中にあるものと記している。会の方針については大宰府研究を主に「九州史」の範囲で捉えること、諸科学を結集した「総合的研究」をめざすこと、在野の研究グループとしての性格を保つこととしている。具体的な活動としては、九州大学・九州歴史資料館・太宰府天満宮文化研究所等における研究発表会の開催と会報の発行であり、将来的には機関紙『大宰府研究』の発刊を目指していた。研究会は昭和48年から56年までに31回行われており、会員も当初26名であったが、7年後には全国76名13団体までになっている（田中1980）。発表テーマとしては、石松好雄「大宰府政庁跡発掘調査の成果について」や倉住靖彦「大宰府政庁跡出土の木簡について」、渡辺正気「大宰府条坊の諸問題」、正木喜三郎「那津官家について」、長洋一「西海道の道と土蜘蛛」、川添昭二「大内義隆発給の大府宣」などがみられ、同会が大宰府史跡の発掘調査成果の情報共有の場であり、考古学・古代史・中世史研究者の交流の機会であったことがわかる。

大宰府史跡の発掘調査により古代最大の地方官衙である大宰府の構造と変遷が解明され、さらにその官司運営や西海道総管機能の実態を物語る出土文字資料が発見されたことは大宰府研究を飛躍的に前進させた。あわせて調査研究成果の発信は研究者の探究心だけではなく、市民の大宰府史跡への関心を喚起し、その社会的な要請や期待に応える形で大宰府研究が進展するという好循環を生み出していった。

3. 九州歴史資料館と九州国立博物館

九州歴史資料館は昭和47年（1972）に大宰府史跡の調査研究をはじめ、歴史資料の収集、保管、調査及び研究を行う福岡県の施設として太宰府市に設置された（画像8）。その翌年には展示室も整備され、文化財の保護に加えて文化財保護思想の普及に資するための展示機能も有することになった。その初代館長となったのは、戦後の大宰府研究を牽引してきた鏡山猛である。九州歴史資料館が誕生する背景には、昭和43年の明治百年記念事業に向けての国立博物館誘致運動の高まりがあった。その盛り上がりを受けて昭和44年に福岡県は福岡県立歴史資料館の建設構想を発表し、太宰府天満宮からの建設用地の寄贈もあって、構想は現実のものとなり、名称も県立施設でありながら「九州」を冠する九州歴史資料館が生まれることになる。



画像8 九州歴史資料館（太宰府市）

もうひとつの背景には、昭和43年から始まった大宰府史跡の発掘調査により、大宰府政庁跡をはじめとした遺跡の重要性が広く認識され、その調査・研究および整備を行うための拠点が太宰府の地に必要になったという事情があった。大宰府跡は、奈良の平城京跡、東北の多賀城とともに「日本三大史跡」と呼ばれている。そして、それらの重要遺跡の調査研究拠点として、中央の奈良国立文化財研究所（現在の奈良文化財研究所）、東の宮城県立の東北歴史資料館（現在の東北歴史博物館）、西の九州歴史資料館が配されることになった。これにより、九州歴史資料館は九州全域を視野に入れた「大宰府学」の推進拠点としての役割を担うことになる。

九州歴史資料館は、開館以来、今日にいたるまで継続して大宰府史跡の発掘調査を実施し、大宰府跡

はもとより、防衛施設である水城・大野城跡、宗教施設としての観世音寺および子院跡、筑前国分寺跡などの遺跡の解明に取り組んできた。その調査成果は、『大宰府史跡発掘調査概報』（年次概報）や『大宰府史跡発掘調査報告書』（年次報告書）として随時報告するとともに、『大宰府政庁跡』『観世音寺』『水城跡』『大宰府政庁周辺官衙跡』などの正式報告書を刊行している。また、出土遺物についても『九州古瓦図録』（柏書房、1981年）を発刊するとともに『大宰府史跡出土木簡概報（一）（二）』（1976・1985年）や『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』（2000年）などを刊行してきた。あわせて九州歴史資料館は、考古学のみならず、文献史学・美術史・保存科学などの幅広い分野から大宰府研究に取り組んできた。その調査・研究成果は昭和49年発行の『大宰府の文化財』を皮切りに、昭和50年以降刊行している『九州歴史資料館研究論集』のほか、『九州の寺社シリーズ』や特別展・企画展図録などで発表してきている。大宰府史跡発掘10・20・30・50年記念特別展図録としては、『甦る遠の朝廷 大宰府』（1978年）・『発掘が語る遠の朝廷 大宰府』（1988年）・『大宰府復元』（1998年）・『大宰府への道』（2018）などがある。40年記念には、「大宰府研究の原点を見つめ」「大宰府史跡の未来」を考える目的で、大宰府研究の基礎を築いた一人である小田富士雄の聞書『大宰府発掘今昔物語』の編集を行い、財団法人古都大宰府保存協会から発行している。あわせて印刷物ではないが、考古学と建築史学の調査研究成果を結集して周年事業として制作された大宰府政庁跡1/100復元模型、中門1/10復元模型、南門1/10復元模型もまた、大宰府研究による貴重な成果物である（画像9・10・11）。

九州歴史資料館の開館10周年にあたる昭和58年には、九州歴史資料館が編集して、考古学・文献史学・人文地理学・建築史学・美術史学・国文学などの幅広い研究分野の論文50余本を収録した『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』上・下二巻（吉川弘文館）を刊行している。大宰府史跡の発掘調査開始から15年後の発刊であり、その間の調査成果とそれに基づく研究の粋を集めたものとなった。九州歴史資料館・福岡県教育庁文化課の職員はもとより、大宰府史跡発掘調査指導委員会の委員やそれまでに調査指導を頂いた研究者、交流がある中国・韓国の研究者、九州各県の文化財担当者の方々など、大宰府の研究史上取り上げるべき錚々たる執筆者が名を列ねている。本書は、大宰府とそれが所在した筑紫に関する学際的・国際的な研究の成果を集大成したはじめての研究論文集である。そのなか



画像9 大宰府政庁復元模型



画像10 大宰府政庁中門復元模型



画像11 大宰府政庁南門復元模型

では研究課題や問題点も提起されており、大宰府研究の基礎文献であることにとどまらず、その後の調査・研究の視角や展望を示唆するものであった。特に大宰府の成立過程を論じた倉住靖彦「那津官家の修造」と八木充「筑紫大宰とその官制」、政庁跡の発掘調査成果を総括した横田賢次郎「大宰府政庁の変遷について」、大宰府の官衙域の範囲を設定した石松好雄「大宰府庁域考」、西海道木簡論の起点となった今泉隆雄・鬼頭清明「平城宮出土の西海道木簡」はその後の大宰府研究に大きな影響を与えた。

それらの研究成果を受けて大宰府を概説および専論した書籍が多く出版されている。代表的なものとしては、考古学の立場からは石松好雄編『日本の美術 大宰府跡』（至文堂、1984年）、文献史学の立場からは倉住靖彦『古代の大宰府』（吉川弘文館、1985年）、律令国家の辺要支配を担った大宰府と多賀城について論説し古代九州・東北の比較研究の礎ともいえる石松好雄・桑原滋郎編『大宰府と多賀城』（古代日本を発掘する4、岩波書店、1985年）、大宰府を考古学・文献史学・文学など多角的に捉えた田村圓澄編『古代を考える 大宰府』（吉川弘文館、1987年）、大宰府や観世音寺に関わる遺跡・遺物・絵図について詳論した高倉洋彰『大宰府と観世音寺—発掘された古代の筑紫—』（海鳥ブックス、海鳥社、1996年）などが挙げられる。なかでも倉住靖彦の『古代の大宰府』は文献史学の立場から緻密な史料の検討に基づき、成立過程から奈良時代までの大宰府について実態把握を試みた名著であり、今なお大宰府を歴史学的に理解するための必読の書である。倉住は其中で大宰府は、長官（大宰帥）の相当位階が高位（従三位）で、地方官司として卓越した規模を有し、中央の八省を上まわる律令制上最大の官司であったと位置付けている。そのバックグラウンドには数多くの大宰府に関する研究論文がある。変質期の大宰府を専論した論文集として正木喜三郎『大宰府領の研究』（文献出版、1991年）がある。本書は大宰府と管内荘園との関係の解明を目的としており、大宰府機構の変質と大宰府領の実態を追究した上で大宰府領形成の背景を探り、中央政府—大宰府—国司—在地の関係について考察している。考古学では小田富士雄が古代大宰府や西海道諸国に関わる論考を数多く発表しており、前述した古代寺院や古瓦の研究をはじめ、大宰府都城・古代山城・山岳信仰・経塚など多岐にわたる。小田は鏡山猛とともに戦後の「大宰府考古学」の基礎を作り上げてきたといっても過言ではない。

大宰府研究の成果を市民に周知するということでは、九州歴史資料館開館10周年記念事業として昭和58年開講の「大宰府アカデミー」が挙げられる。「大宰府アカデミー」は、「大宰府学の新しい成果を広く一般に発表し、史跡への理解を深めていただく」という目的で九州歴史資料館と財団法人古都大宰府を守る会（のちの公益財団法人古都大宰府保存協会）の共催により太宰府天満宮を会場として2年間48講座開催された。開催発表即日に1200人もの受講希望があり、大宰府の歴史や史跡への関心の高さがうかがえる（森2004）。その内容は、古都大宰府を守る会編『大宰府の歴史』全7巻（西日本新聞社、1984～87年）として出版されており、既往の大宰府学の集大成ともいえる充実した講師陣と多彩なテーマ・内容である（画像12）。講演録という性格もあり、その後の研究の進展および方向性を予見した仮説や示唆に富む見解が多くみられる。その後、「大宰府アカデミー」修了生の中から大宰府史跡解説員が誕生し、大宰府展示館を拠点として大いに大宰府史跡の広報普及活動に貢献することになる。財団法人古都大宰府を守る会は、昭和49年に国立九州博物館設置期成会の瓦林潔会長と太宰府町の川邊善郎町長が設立発起人代表となり、太宰府天満宮が基本金を寄付し、「大宰府地方における歴史的風土及ぶ文化財の保存及び活用を図ること」を目的として設立され、今日まで大宰府史跡の公有史跡地管理事業と広報普及事業を担ってきている。それらの事業を通して、多くの人々に史跡にかかわってもらい、常に身近に史跡を感じそれを守りながら、豊かな人生に生



画像12 『大宰府の歴史』

かしてもらいたいという考えに基づく事業を展開している。昭和61年に創刊された機関誌『都府楼』は「太宰府関係の高度な研究が、多方面かつ問題をしぼりながら平易に説述され、太宰府意識への啓発性は高い」読み物として、大宰府研究の成果や大宰府関係遺跡の調査最新情報の発信に大きな役割を果たしてきた（川添2009）（画像13）。その後、平成8～11年度の間、太宰府市文化ふれあい館を会場に大宰府に関する最新の研究成果を学ぶ講演会として大宰府学講座が4年間で40講座開催された。そして、史跡めぐりも合わせた単位取得者の中から大宰府史跡解説員が新たに誕生することになった。

平成8年に開館した太宰府市文化ふれあい館は、水城跡から太宰府天満宮までを結ぶ史跡散策路「歴史の散歩道」のガイダンス機能を持った中核施設である。太宰府市文化財課・太宰府市史編さん室・財団法人古都大宰府保存協会の専門職員が一つ屋根の下に集結する体制でスタートしており、川添昭二がいう「太宰府学」の実践の場である。開館以来、「太宰府の歴史や文化」をテーマに考古・歴史・民俗・美術など、幅広い分野の展示を開催してきている。平成14年に太宰府市史編集委員会・太宰府市文化ふれあい館の主催、太宰府市教育委員会の協力で開催された特別展示「太宰府一人と自然の風景」は、第1部「太宰府市の自然と景観」、第2部「絵図と文芸に見る太宰府の風景」という二部構成の展覧会で、三者の調査研究活動の成果を紹介するものであり、まさに「太宰府学」の実践にふさわしいものであった。また、これまでに館職員有志による『大宰府・太宰府天満宮史料』の講読会のほか、太宰府市教育委員会の山村信榮による西海道古代官衙研究会や中島恒次郎による九州土器研究会など、九州全域を視野に入れた研究会活動を展開しており、大宰府研究の拠点としての役割を担ってきている。

なお、『大宰府・太宰府天満宮史料』を読む会については、九州歴史資料館設立の頃に藤井功の呼びかけで倉住靖彦が中心となり行われた。その後、昭和59年から改めて福岡県内の古代史研究者を主な会員として講読を行い、そのメンバーが『太宰府市史』古代資料編の執筆の主力になったという（長2003）。現在は九州歴史資料館において平成23年以降、九歴ゼミとして市民とともに年12回『大宰府・太宰府天満宮史料』の講読を行っており、人気講座となっている。本史料集がいまなお、大宰府について学ぶ者にとって基本文献であり続けていることの証しである。

九州国立博物館開館前の太宰府には、設立順で記せば、太宰府天満宮文化研究所・九州歴史資料館・財団法人古都大宰府保存協会・財団法人太宰府顕彰会・太宰府市文化ふれあい館など、大宰府の調査研究を推進しその成果を広報普及するための機関が多くあることがわかる。

平成17年10月16日、九州国立博物館が「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」をテーマとする歴史博物館として太宰府市石坂に開館した（画像14）。九州国立博物館の敷地の大部分は、もともと太宰府天満宮の社地であり、国立博物館の誘致運動の中で昭和46年に九州歴史資料館および国立博物館の建設用地として福岡県が寄付を受けたものである（画像15）。福岡県太宰府市に設置が決まった理由としては、「九州、特に太宰府を中心とする地域が我が国とアジアとの交流の窓口



画像13 『都府楼』



画像14 九州国立博物館

として大きな役割を果たしてきた」（「九州国立博物館（仮称）基本計画」）という歴史的・地理的な環境からである。太宰府特定については、古代の大宰府が九州全域を総管し九州の政治・経済・文化の中心であったという歴史的な経緯も考慮されたものと考えられる。その上で多くの参拝客が訪れる太宰府天満宮に隣接する建設用地の提供は大きな後押しとなった（画像16）。国が建設候補地を当地に決定した理由のひとつには、周辺に大宰府跡・観世音寺・大野城跡・筑前国分寺跡などが点在し、「歴史を研究する上での適地」とする判断もあったという。

九州国立博物館の建設地が太宰府天満宮の旧社地に決まったことは、当宮が「大宰府学」の聖地であり続けたという歴史に鑑みれば当然の帰着ともいえる。九州国立博物館の実現は明治32年に岡倉天心が九州に国立博物館を設置することの必要性を説いてから「九州百年の夢」と言われる。これとは別に太宰府では、同26年に太宰府天満宮の西高辻信厳宮司が同宮の神官江藤正澄や絵師の吉嗣拝山らとともに、1000年の御神忌を記念して鎮西博物館の設置を目指すという動きがあった。その計画は内務省から設置の許可を得たもの

の、日清戦争により挫折するという結末を迎えた。その孫である信貞宮司は、祖父信厳が果たせなかった鎮西博物館への思いと、恩師竹岡勝也の「大宰府がアジアとの接点」の言葉を胸に抱き、「世界的視野から見た、九州の文化価値の存在」を信じ続けた。そしてその後半生を国立博物館の太宰府誘致に捧げた。信貞宮司は太宰府にできる国立博物館が「地方の文化の核としての博物館」「九州文化の中心的な広場」となることを期待していた（西高辻1988）。

九州国立博物館実現に向けて大きな推進力になったのは、九州の文化界、学界、政財界が結集して昭和55年に設立された博物館等建設推進会議（のちに博物館等建設推進九州会議）の活動であった。特に翌年から刊行を開始した機関誌『文明のクロスロードMuseum Kyushu』はその象徴として九州国立博物館実現に最大の貢献をした（高倉2004）。本誌には九州の文化や歴史、自然を学際的に扱いながら、九州の独自性と国際性を追求する総合的な研究誌としての性格が求められた（九州国立博物館2016）。その中で大宰府史跡発掘20年・30年の節目には、「大宰府と世界」（第28号、1988年8月）、「大宰府の文華」（第62号、1999年1月）、「大宰府の造営」（第63号、1999年3月）の特集が組まれ、大宰府史跡の発掘調査の成果はもとより、大宰府の歴史的・文化的意義について述べた論考が寄せられた。長年にわたり大宰府史跡の発掘調査に携わり『Museum Kyushu』の編集委員でもあった横田賢次郎は、「九州国立博物館の大宰府設置は、大宰府史跡にとってはこれまでの調査・研究・保存の一つの到達点であり、また新たな始まりでもある」と述べている（横田2006）。本誌の編集委員には、横田のほかに亀井明德・高倉洋彰・赤司善彦など、大宰府史跡の調査研究に深く関わってきた人びとが就いている。

また、福岡県教育委員会や九州国立博物館誘致推進本部等が誘致運動の一環として開催してきた国際



画像15 太宰府天満宮社地と旧九州歴史資料館（写真下中央）



画像16 太宰府天満宮と九州国立博物館を繋ぐアクセス通路

シンポジウムにおいても「大宰府と新羅、百済の文化」（1987年）、「大宰府学事始め 水城と大野城」（1998年）、「海の道、アジアの路（遣唐使船が運んだもの～古代の対外交渉～）」（2004年）など、古代大宰府関連のテーマが取り上げられている。あわせて昭和63年に地元四市一町の各種団体が結集して発足された一般市民を会員とする九州アジア国立博物館を誘致する会（のちの九州国立博物館を愛する会）もまた、大宰府史跡を活用したイベントや古代の大宰府に思いを馳せる催しなど、多彩な誘致・支援活動を展開してきている。

平成11年に策定された九州国立博物館（仮称）基本計画では、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という博物館のコンセプトが明示され、その性格として「アジア諸地域との文化交流の歴史を、全国的な視野から扱う博物館」と「国と博物館が設置される地域とが連携し、相互に協力を行いながら博物館の諸活動及び管理運営を行う博物館」であることが謳われている。調査・研究については、「我が国の文化形成に影響があったアジア諸地域との文化交流の歴史に関する調査・研究」に続いて、「九州国立博物館（仮称）の置かれる地域の歴史的・文化的特色に関する調査・研究」を行うこととなっている。それらの調査・研究は「総合的、学際的なものとして推進し」、その成果は「展示、資料収集及び教育普及・生涯学習活動に常に反映させるとともに積極的に情報発信することにより全国各地の博物館等が行う活動を支援する」こととされている。

基本計画に示されていることは、本稿の「はじめに」で紹介した川添昭二が「大宰府学」を推進する上では「東アジアの中の日本—大宰府を念頭に置く」あるいは「アジアの視点から太宰府—九州や日本を見つめ直」す必要があるとの主張と相通じているところがある。調査・研究の項目にある「置かれる地域の歴史的・文化的特色に関する調査・研究」とは大宰府研究および九州地域史研究を念頭に置いたものと考えてよいであろう。もうひとつの調査研究項目である「アジア諸地域との文化交流の歴史に関する調査・研究」は、むしろ大宰府研究にとって不可欠な分野である。したがって、大宰府研究は九州国立博物館が取り組むべき研究テーマとして最適なものというべきであろう。地域との調査研究の連携については、すでに九州歴史資料館や太宰府天満宮文化研究所、太宰府市をはじめとした地元自治体の教育委員会・博物館・公文書館など、連携・協力の対象として想定される大宰府研究の拠点が数多く存在している。しかも教育普及・生涯学習活動への反映という点では、既存機関の活動により、大宰府研究に対する市民の関心が高いという土壌が十分に育っている。これらの点においても国の「歴史を研究する上での適地」とする判断は的確であったというべきであろう。

調査・研究の総合性や学際性については、これまでも対象となる分野や地域の広範さから大宰府研究において常に求め続けられてきたことであり、すでに問題意識の共有と研究の蓄積が成されているテーマもある。先に紹介した昭和39年発足の太宰府研究会がそうであったように、その後も同様の取り組みが行われている。平成10年に発足した西海道古代官衙研究会は、太宰府市教育委員会の職員が中核となって運営しており、九州内外の考古学・古代史・人文地理学の研究者が集い、西海道つまり九州全域を対象として、大宰府・国府・郡衙などの地方官衙遺跡とそれに関わる寺院跡・官道跡・生産遺跡など各種遺跡の検討会を現地で行ってきたという実績がある。九州国立博物館の開館後ではあるが、平成23年発足の九州山岳霊場遺跡研究会は、九州歴史資料館の学芸員と九州国立博物館の研究員が主力となり、九州の山岳信仰について考古学・文献史学・民俗学・美術史学の共同研究により解明すべく研究会・現地見学会を順次旧国単位で開催してきている（画像17）。



画像17 九州山岳霊場遺跡研究会の現地見学会（池辺寺跡）

もうひとつの研究テーマである「アジア諸地域との文化交流の歴史」という点においては、福岡県教育委員会・九州国立博物館誘致推進本部の取り組みとして、昭和61年（1986）から30年以上にわたり韓国の国立文化財研究所と毎年、相互交流を行っている。福岡県文化財保護課・九州歴史資料館と韓国の国立文化財研究所の交流職員は調査研究テーマを設定して、それぞれの国内を巡り遺跡・遺物および美術工芸品の調査を実施した上で、両国において成果報告会を行ってきた。そのテーマには、古代山城・都城・仏教寺院・瓦・土器・木簡・仏教美術品など、百済・新羅との文化交流に関わるものが多く、大宰府研究の推進においても大きな刺激となっている。これまでの長年にわたる両機関の相互交流により、日韓による研究交流の素地を創り上げてきている。

つづいて大宰府の調査研究において主導的な役割を担ってきた九州歴史資料館との関係についてみてみることにする。平成6年に設置された福岡県アジア学術・文化交流センター（仮称）整備検討委員会では、同センターを九州国立博物館と別施設とし、太宰府学のセンターとして機能させ、その中核組織として九州歴史資料館を発展的に参入させることが検討された（高倉2004）。その後、平成9年に九州国立博物館と福岡県アジア学術・文化交流センターを一体化して施設整備することが決定され、平成11年に「九州国立博物館（仮称）基本計画」が答申されるとともに、「アジア文化交流センター（仮称）の整備について」がまとめられることになる。

一方、九州歴史資料館については、平成15年、九州国立博物館開館後の九州歴史資料館の将来的なあり方を検討する「九州歴史資料館将来構想検討委員会」が設置され、翌年「九州歴史資料館の将来構想について」が答申されている。そして、平成17年にその答申内容をうけて福岡県教育庁文化財保護課により「九州歴史資料館基本計画」が策定されている。答申の中では、九州歴史資料館が行っている業務のうち、展示・教育普及・調査研究機能の一部が九州国立博物館内の福岡県アジア学術・文化交流センター（仮称）に移行することから、九州国立博物館および福岡県アジア学術・文化交流センター（仮称）との連携が重要な課題とされている。検討の結果として、九州歴史資料館と九州国立博物館および福岡県アジア学術・文化交流センター（仮称）は相互補完関係にあることが望ましく両者の連携が重要であることと、九州歴史資料館が引き続き大宰府史跡の発掘調査・研究の主体を担うことが基本的方針として示された。展示機能では「大宰府史跡等を中心とする調査・研究を展示する」こと、調査・研究機能では「大宰府史跡の発掘調査・研究」を項目として掲げた上で「九州一円を視野に入れた大宰府研究を、九国博・交流センターとも連携し、総合的・学際的に取り組むことが必要である」ことが提言されている。役割分担を図示した表では、九州歴史資料館はそれまで「大宰府の調査・研究拠点」であったが、新九州歴史資料館では「大宰府史跡の調査・研究拠点」と位置付けられている。その上で大宰府史跡の発掘調査・研究や各種文化財についての情報の共有化と共同研究の推進が必要であるとしている。「九州歴史資料館基本計画」はこの答申をほぼ踏襲し、九州歴史資料館と九州国立博物館および福岡県立アジア文化交流センターが連携することの重要性が謳われている。

九州歴史資料館の「大宰府の調査・研究拠点」から「大宰府史跡の調査・研究拠点」への位置づけの変更は、役割の低下を意味しているのではなく、大宰府史跡の調査研究を主導する九州歴史資料館と、アジア諸地域との文化交流史の調査・研究を旨とする九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センターが連携・協力することで、ともに「大宰府の調査・研究拠点」としての役割を担うことを表していると考えられる。なぜなら、これまでの大宰府研究のあゆみが如実に物語っているように、大宰府史跡の調査研究成果なくしては「大宰府」を語ることはできず、アジア史的観点なくしては「大宰府史跡」を語ることはできない。その意識の共有や調査研究の連携という点においては、福岡県立アジア文化交流センター・九州歴史資料館間の人事異動にともなう人事交流が功を奏している。大切なことは、それぞれの機関が館の目的や基本方針に基づいて「大宰府研究」を推進するとともに、博物館の特長と博物館資源の特性を活かした調査研究活動を展開していくことである。そして、それらの機関や研究者が結集・連携することにより、「大宰府研究」は確実に前進していくと考えられる。そのことはこれまでの

大宰府研究の歴史が証明してくれている。実際、平成17年に開館した九州国立博物館と平成22年に小郡市へ移転開館した九州歴史資料館は、そのようにして共に大宰府研究の歴史に新たな足跡を刻んできている（画像18）。

平成17年には、九州国立博物館の開館と並び、大宰府研究の歴史において特筆すべき出来事として『太宰府市史』編纂事業の完結がある。『太宰府市史』は、太宰府市史編集委員会の設置から18年をかけて、太宰府市の歴史を全13巻14冊に集大成されたものである。川添昭二はこの市史編纂について「この一大修史事業は、東アジアの中の日本一大宰府を念頭に置き、大宰府を研究対象とする太宰府学の構築・実践をめざすものであった」（川添2007）とし、市史が完結することで「太宰府学の方法や全容がおおむね明らかにされた」（川添2006）と総括されている。古代の大宰府に関していえば、考古資料編は大宰府政庁跡、政庁周辺官衙跡、大宰府条坊跡、山城跡、寺院跡などの発掘調査成果が体系的かつ網羅的にまとめられている。古代資料編は、『大宰府・太宰府天満宮史料』を前提として脱漏を拾遺し史料を厳選した上で読み下し文と詳細な注釈を完備し、さらに解説で史料の意義や時代背景を説明し研究史への言及も十分になされ、自治体史の史料編の鑑となるものである。建築・美術工芸資料編は、古代の大宰府を建築史や都市史の視点から分析がなされ、観世音寺の仏像をはじめとした寺社に伝来した仏像・宝物や美術工芸品が旧蔵品も含めて解説されている。文芸資料編は『万葉集』をはじめとした大宰府ゆかりの詩歌・説話を集成するとともに、江戸時代の大宰府史跡の有り様や当時の人びとの意識を伝える紀行文を収載している。民俗資料編は太宰府天満宮・観世音寺をはじめとした古代創建の寺社の歴史や祭礼、古代の歴史的事象を起源とする伝承（玄昉・菅公伝説）および地名の由来など、参照すべき内容を多く含んでいる。通史編Ⅰは考古学と文献史学および関連諸学の研究成果を余すことなく反映して著述された、前史も含めた「大宰府史」の決定版というべきものである。通史編の別編となる『「古都太宰府」の展開』は本稿の執筆においても大いに参照・引用させて頂いたとおり、大宰府研究および大宰府史跡の保護のあゆみ、太宰府天満宮や市民参加の取り組み、九州国立博物館設置までの道程などが丁寧にまとめられている。本書は市史の編纂過程で継続的に開催され専門分野を越えた議論を重ねてきた市史研究会の成果とされている。まさに「太宰府学」および「大宰府学研究」がどうあるべきかを考える上で示唆に富んだ内容となっている。

平成26年には、太宰府市史の編纂過程で収集された歴史資料と太宰府市の行政文書を収集・保存および活用に供する機関として太宰府市公文書館が開館した。これまでに集積された資料は「太宰府市史と九州史を結ぶ「太宰府学」とよぶうる新たな分野を構築できる内容」を有すると評価されている（高倉2015）。同館は行政文書にかかる「文書資料部門」とともに、太宰府の歴史研究を推進する「太宰府学研究センター部門」を設け活動のもうひとつの柱としている。その調査研究成果や関係文献目録・資料目録については、その前身である太宰府市史資料室の紀要『年報太宰府学』に引き続き『太宰府市公文書館紀要―年報太宰府学―』として毎年発刊されている。「太宰府学」の構築と実践には不断の研鑽が何よりも大事だとする川添昭二編集委員長の想いを受け継いだものである。

その後の大宰府史跡の発掘調査と研究の成果については、横田賢次郎「大宰府史跡研究の現状と課題」（横田2003）や杉原敏之「大宰府の考古学的成果と課題」（杉原2012）にまとめられている。それによれば、大宰府政庁跡については第Ⅰ期政庁の造営時期と筑紫大宰の所在地の問題があること、第Ⅱ期政庁の造営時期は8世紀の10年代後半に収束されること、第Ⅲ期政庁造営の歴史的背景の究明が必要なこと、府



画像18 九州歴史資料館（小郡市）

庁域についてはその範囲の確定と官衙（司・所）の比定が課題であること、条坊については鏡山猛条坊案をはじめとした既往の条坊案の検討と太宰府市・筑紫野市教育委員会による発掘調査の成果に基づく90m方格とする井上信正条坊案の妥当性が高いこと、その上で条坊の成立時期の理解とも関わる第Ⅱ期政庁の中軸線と条坊の基準線との違いの理由の究明が課題であることなどが挙げられる。あわせて、阿志岐城跡の発見や前畑遺跡の「土塁状遺構」の確認を契機として九州歴史資料館が関連自治体と連携して調査を進めている大宰府外郭線の検証や、大宰府条坊内で発見された「客館跡」と鴻臚館跡との関係の解明など、大宰府の防衛や外交機能に関わる新たな課題も出てきている。また、古代山城研究会の活動や熊本県の鞠智城跡「特別研究」事業および古代山城に関する研究会の実施により、古代山城に関する研究が活況を呈しており、それにより研究の深化と学際化、人材の育成が進んでいる。大宰府史跡の最新の発掘調査成果を豊富な図版で紹介した一般書としては、杉原敏之『遠の朝廷 大宰府』（シリーズ「遺跡に学ぶ」、新泉社）が平成23年に刊行されており、現時点で解明されている古代大宰府の全体像を把握することができる。

文献史学については、下條信行・平野博之編の『新版「古代の日本」九州・沖縄』（角川書店、1991年）に古代の大宰府および西海道に関わるテーマがほぼ網羅されており、「古代九州史」ともいえる内容である。前史も含めて大宰府と関わりが深いものとしては、亀井輝一郎「磐井の乱の前後」、永山修一・上村俊雄「隼人の世界」、長洋一「筑紫・火・豊の国の成立」、倉住靖彦・石松好雄「大宰府の成立」、松村一良「西海道の官衙と集落」、北條秀樹「初期大宰府軍制と防人」、岡藤良敬「大宰府財政と管内諸国」、山崎純男・亀井明徳「鴻臚館再発見」、新川登亀男「宗像と宇佐」、西別府元日「九世紀の大宰府と国司」、平野博之「在地勢力の胎動と大宰府支配の変容」などの論考が収載されている。それを大別すると、大宰府の成立論・機構論・機能論（西海道支配・軍事・外交）・変質論と西海道の社会論・文化論に集約できる。

その後の研究の動向としては、大宰府の成立論は、波多野暁三や八木充・倉住靖彦等の所論をベースとして、大宰府の前身とされる那津官家・前期筑紫大宰・後期筑紫大宰・筑紫総領の理解について現在も活発な議論が展開されている。近年では特に酒井芳司が精力的に取り組んでおり、研究史もよくまとめている。機構論では竹内理三の研究を承けて倉住靖彦・正木喜三郎・春名宏昭等が中央官司や国府との比較から大宰府の特質を明らかにしようとしてきた。それらの研究を踏まえて大宰府の官司機構の特徴をまとめれば、地方官司でありながら中央の八省に比肩できる規模を誇り、九州の中枢機関として西海道諸国に対し太政官的な機能を有し、ある程度中央から独立した政務運営を行っていたと述べることができる。その特色は、高位の大宰帥をはじめとした多数の四等官と多種かつ多数の品官の配置であり、大宰府の役割を十分に担うべく分課された被管官司の存在であるといえる。機能論として西海道支配は平野邦雄の研究を基礎として特に財政史の研究が進展をみせており、佐々木恵介や俣野好治・吉岡直人の研究により中央政府・大宰府・西海道諸国の三者の関係や9世紀以降の大宰府による管内支配強化の背景の解明が進んでいる。吉岡は外交・西海道支配・公営田制など大宰府に関わる一連の論文を発表しており注目される。軍事は堀江潔・大高広和等の防衛体制の研究や松川博一の大宰府軍制の研究が挙げられる。外交は大宰府がもつ外交上の権能が焦点となっており、石井正敏・ブルース・バートン・中西正和・中野高行・森公章・重松敏彦等の多くの研究がある。また、注目されている大宰府条坊内の「客館」と鴻臚館との関係については井上信正・八木充・坂上康俊が論じている。西海道研究では特に隼人研究が盛んで、永山修一・菊池達也・原口耕一郎がそれぞれ異なる研究視角から隼人を捉えた専著を発刊している。信仰文化の研究では、「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」の世界遺産登録に向けた取り組みから沖ノ島祭祀遺跡や宗像大社に関わる学際的な研究が盛んに行われている。出土文字資料については、友田那々美・酒井芳司・馬場基等が西海道の付札木簡の特色について論究しており、その起因の解明が課題である。大宰府管内出土の墨書土器については西海道古代官衙研究会や柴田博子等により集成されている。柴田は木簡や墨書土器の分析を通じて九州の文字文化について論じている。大宰府の美術について

は井形進による大宰府式鬼瓦や仏像などの研究があり、都からの影響、大陸からの影響、在地の伝統の3つの要素から捉えることが重要であるとしている。

研究史を振り返ると、大宰府とは何か、その特性を明らかにするには、大宰府が有する西海道総管・軍事・外交の3つの機能がどのような過程を経て大宰府が担うようになり（成立論）、その機能を果たすためにどのような組織が整備され（機構論）、実際各時期でどのように機能したのか（機能論）、そして各機能がどのように変質していったのか（変質論）を明らかにしていく必要があることをあらためて知ることができる。その上で、大宰府と西海道諸国、大宰府と中央政府、大宰府とアジアという3つの関係、言い換えれば九州の中心としての大宰府、律令国家における大宰府、アジアの中の大宰府という3つの視点から捉えることが重要だと再認識させられる。

そのような調査研究動向のなか、大宰府史跡の発掘調査開始から50周年となる平成30年には、大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会の小田富士雄会長の下で九州歴史資料館が事務局となり記念論文集『大宰府の研究』（高志書院）を刊行した。本書は、50年にわたる大宰府史跡および関連遺跡の発掘調査に基づく考古学の成果はもとより、「古代の大宰府」を主要なテーマとして、大宰府史跡調査研究指導委員会や大宰府史跡整備指導委員会の委員をはじめ、考古学・古代史・美術史・人文地理学・土木工学・建築史・保存科学・文化財学と幅広い分野の研究者が執筆し、43本の論文が収載されている（画像19）。前回の『大宰府古文化論叢』と比べると、執筆者の過半が実際に大宰府史跡および関連遺跡の発掘調査や遺物整理、整備などに携わる自治体の文化財担当者であることは大きな特徴である。本書は大宰府研究の現在の到達点と今後の課題を提示することを目指して編まれたものであり、あわせて他分野との研究連携の重要性を示す一書ともなった。その構成をみていくと、「大宰府と西海道」「大宰府の成立と展開」「大宰府の防衛と古代山城」「古代都市大宰府の諸相」「大宰府の瓦と土器」「大宰府史跡の保存」という部立てになっており、現在の大宰府研究の主要なテーマを知ることができる。大宰府研究の体系としては、大別



画像19 大宰府史跡調査研究指導委員会（2018年）

すると、大宰府の機構・機能論、成立論、古代山城論、「古代都市」論、古代集落論、文化論、遺物論、文化財論からなると整理することができる。倉住は大宰府研究を深化させるために「主題ごとに研究史を整理し、その成果と現状を認識するための作業」の必要性を説いている（倉住1975）。本書の執筆にあたっては、この点を意識してもらうようお願いしたこともあり、その「作業」の成果を反映した論稿が多い。これは本書の大きな特徴であり、刊行目的のひとつでもあった。

記念論文集の発刊の前年には、その内容の充実を図る目的で、大宰府研究会を36年ぶりに復活させた。九州歴史資料館と九州国立博物館を会場にして令和元年までに不定期で7回開催し、福岡県および大宰府史跡関連市町の文化財担当者を中心にのべ17名が研究発表を行った。発表内容は、小澤佳憲「大野城の『繕治』について」、重松敏彦「文献資料からみた大宰府の歴史的変遷」、小嶋篤「大宰府史跡出土兵器の研究」、大高広和「木簡からみた西海道の軍事と交通」、菅波正人「鴻臚館をめぐる諸問題」、瓜生秀文「怡土城に関する諸問題」、岡寺良「四王院跡と四王寺山経塚群」、加藤和歳「大宰府出土土器に付着する白色物質の科学的研究」など、分野・時代・地域は多岐にわたっている。その内容は、記念論文集『大宰府の研究』はもとより『木簡研究』42号（2021年）に発表されている。大宰府史跡の調査研究に携わる者が集い、あらためて大宰府研究の現時点での到達点を確認し、現在の問題意識や今後の課題を共有する貴重な機会となっている。

また、九州歴史資料館の大宰府史跡発掘50年記念特別展図録『大宰府への道—古代都市と交通—』では、「大宰府史跡研究の成果と課題」として、小田和利「大宰府政庁跡と周辺官衙跡」、赤司善彦「大宰府の都市造営」、小澤佳憲「大宰府と防衛施設」、齋部麻矢「観世音寺と大宰府の古代寺院」、松川博一「大宰府と交通」という5編の特論を設け、これまでの大宰府史跡研究を振り返っているので参照頂きたい。

おわりに

最後に大宰府研究のあゆみを踏まえ、これまで九州国立博物館が取り組んできた大宰府研究の事例について紹介する。

九州国立博物館と九州歴史資料館による大宰府研究における連携の好例としては、平成22年の九州歴史資料館開館記念イベントとして開催された九州国立博物館「大宰府学研究」講演会『展望・大宰府研究—蔵司跡の調査から—』と、平成30年の大宰府史跡発掘50年記念シンポジウムとして開催された九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙—大宰府政庁周辺官衙跡の調査から—」を挙げることができる（画像20）。ともに九州国立博物館と九州歴史資料館の職員が登壇して調査研究報告を行っており、約10年間の大宰府史跡の発掘調査とそれに基づく大宰府研究の進展を実感できるものであった。そして当日の参加者は前者が260名、後者が277名と九州国立博物館のミュージアムホールがほぼ満席という状態であり、市民の大宰府研究への期待と関心の高さを物語っている。また、平成22年の講演会の開催にあたって、九州国立博物館・九州歴史資料館・公益財団法人太宰府顕彰会・公益財団法人古都大宰府保存協会の四者が主催団体となっており、これまで見てきた大宰府研究のあゆみを考えれば感慨深いものがある。

九州国立博物館と九州歴史資料館が共同企画・主催として実現した展覧会としては、平成25年度に九州国立博物館・太宰府天満宮宝物殿の2会場で開催された九州国立博物館トピック展示「山の神々—九州の霊峰と神祇信仰—」がある。本展は太宰府天満宮文化研究所による調査研究の蓄積がある宝満山と、九州歴史資料館が添田町とともに総合調査を進めていた英彦山を主対象とした展示構成となっている。この展覧会は平成18年度の九州国立博物館特別展「海の神々」と対をなすものでなり、海神信仰と山岳信仰は言うまでもなく大宰府研究において重要なテーマである。そのこともあり、両館において山岳信仰をテーマとした展示が多く企画されている。九州国立博物館では、平成20年度にトピック展示「大野城と四王寺」、平成21年度の「祈りの山宝満山」、平成29年度の特別展示「六郷満山展～神と仏と鬼の郷～」、令和2年度の特集展示「筑紫の神と仏」があり、それに先立つ平成19年度の特別展「未来への贈りもの—中国泰山石経と浄土教美術—」では九州霊山の経塚遺宝が一堂に会している（画



画像20 大宰府史跡発掘50年記念シンポジウム（2018年）



画像21 特別展示「六郷満山展」

像21)。一方、九州歴史資料館では平成23年度に企画展「北部九州の霊山と経塚」、平成24年度に企画展「聖地四王寺山」、平成27年度に特別展「四王寺山の1350年—大野城から祈りの山へ—」、平成29年度に特別展「霊峰英彦山—神仏と人と自然と—」が開催されている。そのように見てくると、両館の展示が連動しつつ、その内容を深化させていることが看取できる。その背景には両館間の人事交流により研究成果と問題意識の共有が図られたことがある。くわえて両館員が主要な構成員である九州山岳霊場遺跡研究会の調査研究成果も大きく反映されている。

九州国立博物館と太宰府天満宮文化研究所による連携としては、平成20年度の特別展「国宝天神さま—菅原道真の時代と天満宮の至宝—」を挙げることができる。本展では菅原道真公と天神信仰ゆかりの宝物が菅公終焉の地太宰府・九州国立博物館に集った。展示の企画・実施にあたっては、文化研究所の味酒安則主管に展示内容の検討はもとより出品交渉にも同行してもらった。記念シンポジウムも2回開催され、天神信仰の歴史として「天神さまと大宰府」、その美術として「北野天神縁起絵巻」をテーマに情報の共有と研究の深化が図られ、その講演録も発刊されている。その後、平成22年に太宰府天満宮文化財研究所と九州国立博物館の研究員を中心に天神縁起研究会が発足され、2年間にわたり太宰府天満宮所蔵の満盛院本天神縁起画伝の内容の検討を行った。その調査研究成果は鈴木幸人・味酒安則等編『太宰府系天神縁起の世界』としてまとめられ、平成24年に財団法人太宰府顕彰会から公刊された。さらに令和3年春にその成果に基づいて九州国立博物館で特集展示「天神縁起の世界」が開催されている。

九州国立博物館と大宰府史跡関連自治体との連携企画としては、平成21年度の大野城市教育委員会とのトピック展示「牛頸須恵器窯跡とその世界」や平成27年度の太宰府市教育委員会とのトピック展示「新羅王子がみた大宰府」があり、どちらも国史跡指定を記念した展示である（画像22）。前者は中山平次郎・鏡山猛の土器片採集や島田寅次郎の須恵器窯跡の発見から現在の発掘調査・研究の成果と保存にいたるまでを紹介し、牛頸須恵器窯跡のすべてがわかる展示であった。後者は大宰府条坊内で「客館跡」が発見され特別史跡に追加指定されたことを記念した展示であり、あわせて鴻臚館跡出土品も展示された。太宰府市教育委員会のこれまでの大宰府条坊跡の調査研究成果が余すことなく発信することができる展示および図録の内容となった。大宰府史跡発掘50年に当たる平成30年度は九州国立博物館特集展示「大宰府研究の歩み」を開催し、江戸時代から現代に至る大宰府研究の歴史をたどる展示を行った（画像23）。本展と前後して筑紫野市歴史博物館で企画展「西都大宰府への道—見えてきた大宰府南郊の風景—」、九州歴史資料館で特別展「大宰府への道—古代都市と交通—」、太宰府市文化ふれあい館で「まると太宰府歴史展2018」のトピック展示「大宰府史跡発掘50年」、大宰府展示館で記念展示「大宰府史跡ものがたり」が行われ、年間を通じてリレー的に大宰府をテーマ



画像22 トピック展示「新羅王子がみた大宰府」



画像23 特集展示「大宰府研究の歩み」

とした展覧会を観覧することができた。大宰府研究の推進や情報発信において、関連自治体との連携が不可欠だと実感する一年となった。

アジア交流史研究という点においては、誘致運動の段階から韓国・中国の研究者を招聘しての国際シンポジウムを開催してきたという実績がある。開館後も大宰府研究に関わるものとして、平成17年度の福岡県教育委員会・大韓民国国立文化財研究所交流20周年記念の「日韓の古代山城を掘る」、平成18年度の木簡学会共催の「漢字文化のひろがり—日本・韓国出土の木簡を中心に—」、平成19年度の日本・中国・韓国学術交流協定締結記念の「百済と古代東アジア国際交流」、平成20年度の大宰府史跡調査40年・日本考古学協会創立60周年記念の「百済、倭そして大宰府」、平成23年度の「百済文化と古代日本～百済研究の新展開～」などが挙げられる。これらの国際シンポジウムの多くは、福岡県教育委員会と韓国の国立文化財研究所との相互交流の実績によるところが大きい。

大宰府研究の進展にとっては、学会の招致も大きな契機となる。平成18年度には木簡学会の特別研究集会を九州国立博物館・福岡県教育委員会等の共催、太宰府市教育委員会・

西海道古代官衙研究会の後援で開催している（画像24・25）。「西海道木簡研究の最前線」をテーマとして、柴田博子「西海道の古代出土文字資料」や酒井芳司「大宰府史跡出土木簡」などの研究報告が行われた。大宰府出土文字資料の研究にとっては、それまでの総括となる内容であった。前掲の国際シンポジウム「漢字文化のひろがり—日本・韓国出土の木簡を中心に—」は特別研究集会の市民向け関連イベントとして開催された。平成25年度には第34回日本山岳修験学会として太宰府・宝満山学術大会が日本山岳修験学会・同大会実行委員会（西高辻信良会長）・九州国立博物館の主催、太宰府天満宮・竈門神社・九州歴史資料館・公益財団法人太宰府顕彰会の共催で実施された。基調講演は西谷正「東アジアの中の大宰府をめぐる山岳信仰」、シンポジウムは山からの視点で「日本文化の形成をアジア史的観点から考える」ことをねらいとして、「大宰府をめぐる山々と海彼」をテーマに行われた。

本誌『大宰府学研究』については、昭和48年発足の大宰府研究会が機関誌『大宰府研究』を発刊しようとして果たせず、九州国立博物館でも開館以来検討してきたが実現せずにきていたところ、平成30年度にその第1集が発刊された。これは45年の時を経て先学の夢を実現したことになる。本誌が大宰府研究の発展に寄与するところは大きいと期待される。その英断と実行力に敬意を表するところである。



画像24 木簡学会九州特別研究集会（2006年）



画像25 重要文化財 大宰府跡出土木簡

参考文献

- 池上年1918「都府楼址の研究」『考古学雑誌』8—7・11
- 石松好雄・桑原滋郎編1985『大宰府と多賀城』岩波書店
- 伊崎俊秋2016～2018「大宰府史跡について（上）（中）（下）」『都府楼』第48～50号
- 伊崎俊秋2018「大宰府史跡と島田寅次郎」『大宰府の研究』高志書院
- 石松好雄編1984『日本の美術 大宰府跡』至文堂
- 石松好雄2004「大宰府史跡発掘史」『「古都太宰府」の展開』太宰府市
- 一瀬智2009「福岡藩における大宰府跡の保護・顕彰について」『九州歴史資料館研究論集』34
- 井上忠・渡辺正気編1993『恩師長沼賢海先生の思い出』鏡山猛
- 井上理香2004『「開発」と「保存」—戦後太宰府における史跡保存問題—』『「古都太宰府」の展開』太宰府市
- 岩永省三、2016「中山平次郎の研究—継承的展開と九州大学—」『九大百年 美術をめぐる物語【論集】』九州大学総合研究博物館
- 岡崎敏・渡辺正気1980「鏡山先生の人と学問」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 小田富士雄1984「鏡山猛先生の業績を偲ぶ」『考古学ジャーナル』240号
- 鏡山猛1937「太宰府の遺跡と條坊」『史淵』第16・17輯
- 鏡山猛1957「福岡県筑紫郡太宰府遺跡」『日本考古学年報』5
- 鏡山猛1968『大宰府都城の研究』風間書房
- 鏡山猛1969「長沼賢海著『邪馬台と大宰府』」『日本歴史』第257号
- 鏡山猛1979『大宰府遺跡』ニュー・サイエンス社
- 川添昭二1994「大宰府の変遷」『九州の中世世界』海鳥社
- 川添昭二1995「大宰府学と太宰府市史編纂」『Museum Kyushu』第50号
- 川添昭二1997「竹内理三先生と九州史研究」『九州史学』第117号
- 川添昭二2004「貝原益軒の菅原道真・太宰府天満宮研究」『「古都太宰府」の展開』太宰府市
- 川添昭二・吉原弘道2006「あとがき」『大宰府・太宰府天満宮史料 太宰府天満宮史料補遺』太宰府天満宮
- 川添昭二2007「創刊の辞」『年報太宰府学』創刊号
- 川添昭二2009「太宰府学の確立をめざして」『都府楼』第37号
- 九州国立博物館編2016『九州国立博物館史』
- 九州国立博物館編2018『大宰府史跡発掘50年記念特集展示「大宰府研究の歩み」』
- 九州歴史資料館編2009『大宰府発掘今昔物語』財団法人古都大宰府保存協会
- 九州歴史資料館編2018『大宰府への道—古代都市と交通—』
- 倉住靖彦1975「大宰府研究の現状と問題点についての序章」『日本史研究』第153号
- 倉住靖彦1979『大宰府』教育社
- 倉住靖彦1985『古代の大宰府』吉川弘文館
- 古代史研究会1963「大宰府研究の成果と課題（1）～（3）」『九州史学』第21・22・23・25号
- 古都大宰府を守る会編1984～87『大宰府の歴史1～7』西日本新聞社
- 重松敏彦2004「古代大宰府研究」『「古都太宰府」の展開』太宰府市
- 重松敏彦2007「古代における「ダザイフ」の表記について」『年報太宰府学』創刊号
- 重松敏彦2008『「太宰府備考」と太宰府址碑』『年報太宰府学』第2号
- 下條信行・平野博之他編1991『新版〔古代の日本〕九州・沖縄』角川書店
- 杉原敏之2011『遠の朝廷 大宰府』新泉社
- 杉原敏之2012「大宰府の考古学的成果と課題」『海路』第10号
- 高倉洋彰1996『大宰府と観世音寺—発掘された古代の筑紫—』海鳥社
- 高倉洋彰2004「九州国立博物館の誘致」『「古都太宰府」の展開』太宰府市
- 高倉洋彰2015「太宰府市公文書館報の刊行にあたって」『太宰府市公文書館開館記念誌』太宰府市
- 竹内理三1963・64「九州の地方史研究(30)～(36)」『歴史評論』159・161～167)
- 大宰府研究会1973「大宰府研究会の発足にあたって」『大宰府研究会会報』No.1
- 大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編2018『大宰府の研究』高志書院
- 田中健一1980「大宰府研究会のあゆみ」『西南地域史研究』第4輯
- 田村圓澄編1987『古代を考える 大宰府』吉川弘文館
- 筑紫豊1969『「天満宮御文庫」について』『飛梅』創刊号
- 長洋一2003「編集後記」『太宰府市史 古代資料編』太宰府市
- 長沼賢海1919「天満天神の信仰の変遷（上）（中）（下）」『史林』4—2・3・4号
- 西高辻信貞1964「発刊の辞」『大宰府・太宰府天満宮史料 第一巻』太宰府天満宮
- 西高辻信貞1988『邂逅 西高辻信貞遺稿集』太宰府天満宮

日比野利信2004「筑紫史談会の成立と活動」『「古都太宰府」の展開』太宰府市
藤井功・亀井明德1977『西都大宰府』NHK出版
三輪嘉六2014「古都大宰府保存協会40周年に寄せて」『古都大宰府—まもる つたえる いかす—』公益財団法人古都大宰府保存協会
森弘子1988『西高辻信貞 わがいのち火群ともえて』太宰府天満宮
森弘子2004「文化財保存と市民参加」『「古都太宰府」の展開』太宰府市
横田賢次郎2003「大宰府史跡研究の現状と課題」『七隈史学』第4号
横田賢次郎2006「ミュージアム九州と大宰府史跡」『Museum Kyushu』第81号

第2章

大宰府史跡の歴史

杉原 敏之

はじめに

古代大宰府への認識は近世以降に本格化した¹が、大正期に興った実証的研究方法の導入によって飛躍的に深化した。また、同時期に成立した史跡名勝天然記念物保存法による大正10年（1921）の水城跡、大宰府跡の指定は、研究の進展とともに史跡保存の考えを広く浸透させた。さらに、昭和30年代後半に起こった、大宰府史跡の保存問題は、我が国の史跡保存の歴史を語る上での象徴的事象として、その後の大規模史跡保存の方向性を示した。そして、その流れの中で開始された大宰府史跡の発掘調査は今日まで継続され、古代大宰府の確かな歴史像が築きかれてきた。

この大宰府史跡の歴史を繙く時、昭和45年（1971）の指定拡張以後、大規模かつ体系的に進められてきた発掘調査から、現代史として記憶に残る50年余りの歩みが強調されることが多い。しかし、あらためて100年という時間の流れの中で大宰府史跡を捉えようとする時、その前半期に位置づけられる大正10年（1921）の史跡名勝天然記念物法制下における、史跡指定と研究動向を理解することは、今日の大宰府史跡の在り方を考えていく上でも重要である。

本稿では、大正期の史蹟名勝天然記念物保存法における史跡指定、昭和期に起こった保存問題と史跡指定拡張という、大宰府史跡の歴史における大きな2つの画期を取り上げ、継続する大宰府研究と対比させながら、大宰府史跡総体としての歴史的理解を試みたい。

1. 史蹟名勝天然記念物保存法と大宰府史跡の指定

（1）近世における大宰府の認識

威容を誇った古代の大宰府は、長らく歴史の中に埋没していた。この大宰府に再び、光が当てられたのは近世以降のことである。福岡藩の儒者貝原益軒が、元禄元年（1688）に編纂を開始した『筑前国続風土記』は当時の地誌としても資料的価値が高いが、この中で、「太宰府旧址」「都府楼址」「大城山」「水城」等、大宰府の遺跡の現状や歴史的位置が詳しく述べられている。このうち、元禄12年（1699）に御笠川の辺で掘り出された「大なる木」は水城跡の木樋とみられ、観世音寺に伝来する2つの木樋が該当する可能性もある。

19世紀以降、絵図によって大宰府を描写、記録した資料が数多く見られるようになる。文化3年(1806)には、大野城跡や大宰府政庁跡、大宰府条坊跡を詳細に記録した『太宰府旧蹟全図』が完成している。さらに文政3年（1820）、「文政三庚辰年三月観世音寺村之内旧跡礎現改之図」が作成された。これは寛政年間に作成された絵図よりも詳細で、観世音寺境内、都府楼跡、蔵司跡など、三地区に分けられた礎石203個の現状が正確に記録されており、今日の大宰府研究における重要な基礎資料となっている。また、同じ文政年間作成の奥村玉蘭による『筑前名所図絵』は文章と挿図により、当時の大宰府の様子を詳しく伝えている。この後も、文化11年（1824）に青柳種信は、『筑前国続風土記拾遺』の編纂を開始して、「太宰府官舎古址」「学業院旧蹟」「大城山・四天王寺大山寺」などを記した。そして、天保12年（1841）、伊藤常足によって『太宰管内志』全82巻が献上された。

この近世福岡藩の時代、歴史上の大宰府に対する顕彰の機運と共に、史跡の具体的保護措置が講じられた。元禄年間には、福岡藩三代藩主黒田光之によって観世音寺の金堂・講堂が再建され、さらに寛政

年間には、藩によって都府楼跡周辺の礎石の移動が禁止された。

（2）我が国最初の史跡指定と大宰府

近世以降の古代大宰府を顕彰する機運は、明治維新を迎えて再び高まり、大宰府政庁正殿跡には、明治期以降に相次いで碑が建てられた。明治4年（1870）に「都督府古址」が御笠郡乙金村大庄屋高原善七郎美徳によって建立された。そして、明治13年（1880）に県令渡辺清の撰文と有栖川熾仁親王の篆額による「太宰府址碑」が御笠郡有志の発起によって建立された。さらに大正3年（1914）、寛政年間に亀井南冥が撰文した「大宰府碑」が門流の弟子たちによって建てられた（筑紫史談会1914）。また水城跡には、大正4年に水城村青年会によって大正天皇御大典記念として「水城大堤之碑」が建立された。

大宰府史跡における大きな画期となったのは、大正8年（1919）4月10日に制定された史蹟名勝天然記念物保存法である。この法は、明治30年（1897）の古社寺保存法から続く史蹟保存の国施策の現実的な取組であり、「帝國古蹟取調会」（1990〔明治43〕）を前史として発展した、「史蹟名勝天然記念物保存協会」（1911）会員の議員によって貴族院に提出された「史蹟及天然記念物二関する建議案」を踏まえ成立した（坪井2000、齋藤智志2015他）。我が国の本格的な記念物に関する法令であり、指定物件の保存処置と罰則（今日まで続く史跡の現状変更）などを定め、内務大臣が指定して内務省の管轄に置かれることとなった。この法令によって、大正10年（1921）3月3日、水城跡、大宰府跡をはじめ我が国最初の史跡指定が全国46か所行われた（内務省告示第38号）。この水城跡、大宰府跡の2つの史跡は、「史跡名勝天然記念物要目」の史跡の四、古城址、城砦、防壘、古戦場、國郡廳址その他政治軍事に関係深き史跡に含まれた。この他、九州地方では、佐賀県多久聖廟、熊本県大村横穴群、鹿児島県隼人塚、大隅国分寺址が指定されている。

その後、大正11年10月12日に筑前国分寺跡と国分瓦窯跡が、昭和7年（1932）7月23日に大野城跡（当時は「大野城跡竝四王寺跡」）が、昭和12年12月12日に基肄（椽）城跡が、それぞれ国指定史跡となった。当初の指定は、大宰府跡については礎石の分布する範囲のみで、水城跡は地表に残る土塁線が対象であった。大野城跡についても土塁・礎石等の範囲が中心であり、各史跡共に重要地の点的指定であった。

大正期は国の施策としての史跡保存の取組が進んだ時期であるが、本県においても、1916年（大正5）に「福岡県史蹟名勝旧跡保存訓令」が発せられた（伊崎2018）。県内の史跡の保護や顕彰に取組むよう示されたものであるが、内務大臣の訓示を契機とするなど、国の史跡名勝天然記念物保護の取組の流れの中で進められたものである。なお、これら、大宰府史跡を構成する史跡指定には、福岡県学務部社寺兵事課史蹟名勝天然記念物保存係が担当した。その後、「福岡県史蹟名勝天然記念物調査委員会」（竹岡勝也、長沼賢海、鏡山猛、玉泉大梁、川上市太郎など）によって進められた。これらの調査成果として『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』が刊行された。

2. 実証的研究と大宰府像の認識

（1）実証的研究の嚆矢

明治期の大宰府研究には、1898年（明治32）、大宰府の起源や沿革などについて本格的に論じた重田定一による「大宰府職官考」（重田1898）、藤井甚太郎による『歴史地理』、『考古学雑誌』に大宰府の遺跡に関する論考がある（倉住1983）。さらに、1902年（明治36）、高原謙次郎・江島茂逸による地誌類をまとめた『大宰府史鑑』が刊行されている。

大宰府史跡に関する実証的研究は、1913年（大正2）、現在の鹿児島本線拡幅工事による水城跡の開削を契機とする、東京帝国大学の黒板勝美や九州帝国大学の中山平次郎による土塁の考古学的観察を嚆矢とする（黒板勝美「福岡県学術研究旅行報告書」『史学雑誌』1913、中山平次郎「水城の研究」『筑紫史談会講演集』1914他）。黒板勝美は、「…粘土の層が色々な色をしています。その一つの層が厚さが凡五寸位で、そ

の層には、柴や木の葉が層をなして置かれてあります。」と説明した。一方、中山平次郎は、「要する処表層部と基底部と二部に大別することができる」とし、表層部は「壘層の方向は、粘土層に近き深い層においては、概して水平であるが、大隆起の処では、頂部に近づくに従いて盤根部に向かった弱気弓状の湾曲を呈している」と述べた。この両者の観察所見から、水城跡の土塁は上層と下層に分かれて積土の土質が異なることや、下層となる基底部の粘質土中には枝葉が敷かれているなど、今日的にみても水城跡の土塁構造に関して重要な指摘がある。

また、黒板勝美が最初に現場を訪れた時、美術大学校卒業生の久富寿年に水城跡の断面図を描かせた。それが今日、「筑前大宰府水城の一部切堀図」（東京大学日本史研究室所蔵、以下「切堀図」）と呼ばれる水彩画である。この切堀図自体は幅1mにも満たないが、掘削時の状況や土塁断面の状態を忠実に表現しており、歴史的資料としても重要である。

（2）新たな研究方法の導入と遺跡の探究

大宰府政庁に関して、実証的研究が導入されたのは大正期である。

大正7年（1918）、修猷館の池上年は、「現状の詳細と正確なる実測図を提供するにあり」として、県立工業高校、修猷館学生と共に、トランシット、ポールを用いて大宰府政庁の礎石測量調査を実施した（池上1918）。この調査では、總門（南門）、中門、本殿（正殿）大宰府政庁の中軸線を求め、磁北より5度程度東に振れること、各礎石の配置が中軸線に対して直角の関係にあることを示した。そして、本殿址を中心に各施設間の距離の測量、總門（南門）礎石を零（0）として、中門址、本殿址などの礎石高低差の計測を行い、正殿跡の礎石観察から、前面は障壁を設けず正面が吹き抜けの構造であったことを推察している。ただし、研究報告は上・中でとどまり、遺構の具体的な復元配置には至っていない。

1931年（昭和6）には、長沼賢海・鏡山猛が水城跡の木樋の本格的な発掘調査を行った（長沼1932）。国道拡幅を契機として発見された東門地区の木樋について、土塁を横断する形で取水口から吐水口までの4地点までのトレンチ調査を実施して、木樋の詳細な観察を行っている。特に、木樋の底面の高さや堆積状況などから、取水口からの積極的な導水を想定せず、木樋周囲にみられた枝葉等と併せて木樋を湿気抜きと考えた。この調査では、下成土塁に埋設された木樋の構造を検討し、また水城の太宰府側の貯水を否定している。その後、調査に参加した鏡山猛は、木樋の埋設が複数箇所に進んでいることや、土塁の断面形状や東西の丘陵部よりも中央部の御笠川付近が低くなる形状から、土塁内側での貯水説を否定している（鏡山1968）。

さらに、長沼賢海は、大野城址の本格的な調査についても主導した。大野城址と四王寺址の歴史的経過について触れ、「大野城及び四王寺の遺蹟」の題目の下に遺跡の種類によって分類している。の中で、大野城が馬蹄形を呈する山であること、南尾根に分水嶺があり北側に深い谷があることから、谷沿いにめぐる石塁と水門の關係に注目した。そして、水手口

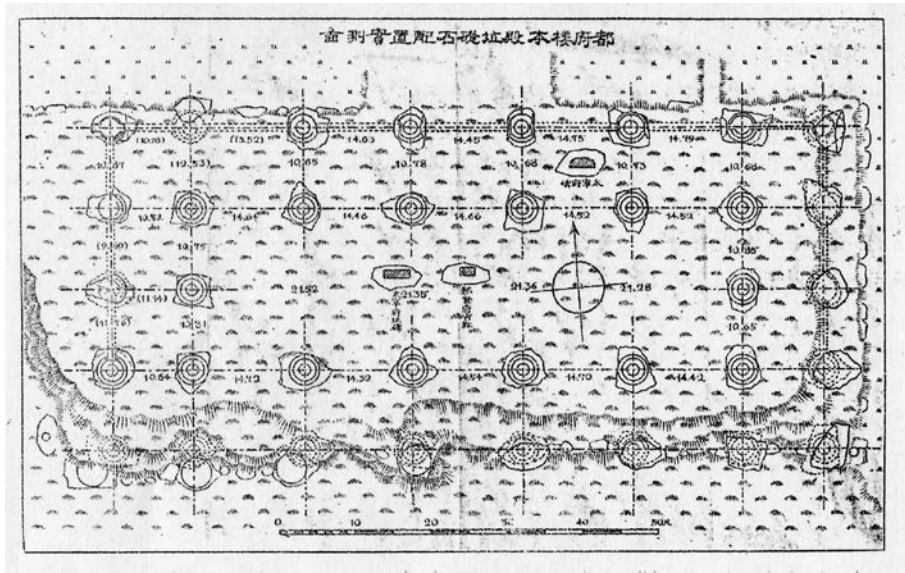


図1 大宰府政庁正殿跡の実測図（池上年1918）

石塁の水手門址（太宰府口城門）の詳細な観察と測量調査を行い、坂本口、水城口の「門礎」との比較により、水手口石塁に繋がる太宰府口城門を新しい時期に比定した。また、古瓦の堆積状況から古い時代に門が廃絶されたとみている。これは、測量調査を中心としながらも、詳細な観察によって遺構の新旧関係を捉えた調査として今日的にみても重要である。

このほか、中山平次郎は大宰府史跡周辺において古瓦を採集するなど遺物研究を精力的に進め、大正4・5年（1915・16）に『考古学雑誌』に「古瓦類雑考」を発表した。また、文献などを踏まえて、鴻臚館跡と現在の福岡城址周辺に特定するなど、発掘調査によらない採集遺物の観察などによって今日的に見ても重要な基礎的研究を行っている。

（3）大宰府都城の認識

昭和期、鏡山猛は礎石建物の測量を行い大宰府政庁の建物配置を復元した（鏡山1937）。江戸期の「礎石改之図」を参考にし、都宮の朝堂院、豊楽院などと対比しながら、改めて、政庁内の6群の礎石建物を総称して「都府楼」とし、政庁中軸線を基準とする、南門、中門、正殿と東西に脇殿が並んで回廊が巡る配置を復元した。鏡山は、この政庁を基準として、東西の丘陵上に残る字名から、西の蔵司、東の月山の由来について触れ、都府楼を中心とする大宰府府庁の四至と推定している。また、都府楼の建築には令の小尺、唐尺の使用を特定している。これは、観世音寺講堂においても同様の結論に至っている。観世音寺を方三町四方に復元している。

さらに、『観世音寺文書』の土地施入記事に「条」、「坊」、「町」等の単位が見られることや、条里制や地割の検討から、政庁中軸線上に都の朱雀大路に相当する大路を想定し、方一町（約109m）を単位とする、南北22条、東西左右郭12坊の大宰府条坊を復元した。そして、大宰府政庁を中心とする府庁域を方四町、観世音寺を方三町、学校院を方二町、筑前国分寺方三町とした。この鏡山による、政庁の

建物配置や府庁域の復元は、大宰府を都宮と比較検討した上で重要であり、大宰府史跡の本格的な発掘調査開始まで、大宰府を理解する上での一つの基準とされた。この他、福山敏男による測量成果を基にした観世音寺の伽藍の復元研究がある。

竹内栄喜は、朝鮮半島の山城との比較によって、大宰府総体を軍事的観点から捉えようとした（竹内1929）。朝鮮三國時代の山城の現地踏査を踏まえ、大宰府と百済最後の王都泗沘との比較を行い、戦略的視点から大宰府防衛の山城である、水城・大野城・基肄城の配置を捉えようとした。朝鮮王都防禦の典型的築城型式と称すべきものとし、大野城と水城の関係性、さらに水城西側の防禦線と土塁の存在を重視した。また、大宰府南の湯町に大門の地名を有することから、この付近に羅城門を想定し、都督府の正面から南へ直進する大路である、朱雀大路を想定し

た。西方正面に対しても「軍事常識及び百済築城の型式」から何かの築城施設を想定している。水城の西方地区における築城遺跡を探し、大土居水城、天神山において水城と同一の構造の土塁としている。また、軍事的観点から、八幡愚童記の水城の深田の記載に注目し、「水城の前には水湟の如きものがあり、年を経るに従って深田化したと考えられぬこともない」とし、百済王都の自然の要害である大江に代わるべき水湟を水城が設けたとする、今日的にみても重要な指摘がある。

3. 大宰府史跡の浸透と研究の背景

大宰府史跡の実証的研究は、戦前の史跡保存の諸活動と密接な関わりを持って開始された。

史跡名勝天然記念物保護の取組に深く関わっていた黒板勝美は、1913年（大正2）、水城跡の土塁調査直後の8月14日、筑紫史談会例会において「史蹟調査の方法」と題した講演を行っている。史蹟調査の方法について「議論派」と「實績考證派」に分けるのではなく、社会の連続した事実として研究する必要があるとし、「先づは古墳は古墳として保存するが宜し、調査するも宜し、唯幼稚なる説によりて発掘することは慎むべし」、「何ごとにおいても調査と研究は区別すべし」、「史料及史蹟は、其真偽を論せず、共に保存の必要を論じ」という史跡保存の必要性を述べている。このように、当時、史蹟名勝天然記念物保存の取組に深く関わっていた黒板勝美は本県の文化財保護の啓蒙的活動にも影響を与えている。

黒板の講演記録が残された『筑紫史談』創刊号には、武谷水城が「大野城の起因及遺址」で大野城跡の歴史的変遷の概説と現地踏査について紹介している。その中では、内務省の関野貞博士が1913年（大正2）8月に大野城址を調査する際、福岡縣廳より筑紫郡役所を経て高原謙次郎氏に依頼し、県廳の森弘と水城村長とで動向したこと、その後も、森、高原氏は考古学会谷井氏と4・5回同行したことなどについて触れている。この記録から、当時論争のあった神籠石との関係において大野城跡が注意され、本格的踏査を筑紫史談会が関わって積極的に行われたことが分かる。

さらに武谷は、水城跡について、「特に今大堤の欽けて居る部分は、石築であつたろうと云ふことが、推測さるのであるが、其石築の形を認め得られぬのは遺憾である。」として、現地踏査と聴き取りの際に、明治43年の御笠川改修工事で地下約三尺に埋没したる壘石の情報を得たことについての記載があり、これは、現在も議論されている御笠川の洗堰に関する先駆的所見としても重要である。また、朝鮮半島の百済の泗沘城の現地踏査を踏まえ、「朝鮮式山城」「韓式」などの用語とともに大野城跡との比較検討を行うなど実証的な比較研究が開始されている。

この号では、高原謙次郎が「太宰府史蹟梗概」として大宰府の歴史的変遷について解説している。おそらく古代大宰府の遺跡の総体として、「大宰府史跡」を公に解説使用しはじめたのは、この高原謙次郎と考えられる。また、この筑紫史談会における大宰府史跡に関する活動は、後世の評価かからみれば、確かに論議も郷土史的であり、時代を反映した軍事・国防史的傾向と評される側面もある。しかし、亀井南冥の「大宰府碑」の建立経緯について紹介し、武谷水城が「水城大堤之碑」の建立を主導するなど遺跡の顕彰活動によって大宰府史跡の浸透に大きく貢献していったことは確かである。こうした、筑紫史談会の活動状況が、水城跡、大宰府跡が、史跡名勝天然記念物保存法における史跡指定の基礎的調査となっていくたものと思われる。

この大正期、史蹟名勝天然記念物保存事業の動きの中、1916年には、福岡縣内務部長佐竹義文が「史蹟名勝の保護に就いて」を『筑紫史談』に寄稿している。その中では、「保存の方法を講じ同時に之等の臺帳を作成して之が壊滅散逸を防ぎ然る後徐に調査の上顕彰の途を策することとし」、名勝、旧蹟、古墳墓、「天然記念物」の四種の臺帳を県庁に置くよう郡市長に命じたとしており、当時、史蹟名勝天然物保護の考えが浸透しつつあったことが分かる。

史蹟名勝天然記念物保存法による水城跡、大宰府跡の史跡指定は、結果として地域行政の整備を促す

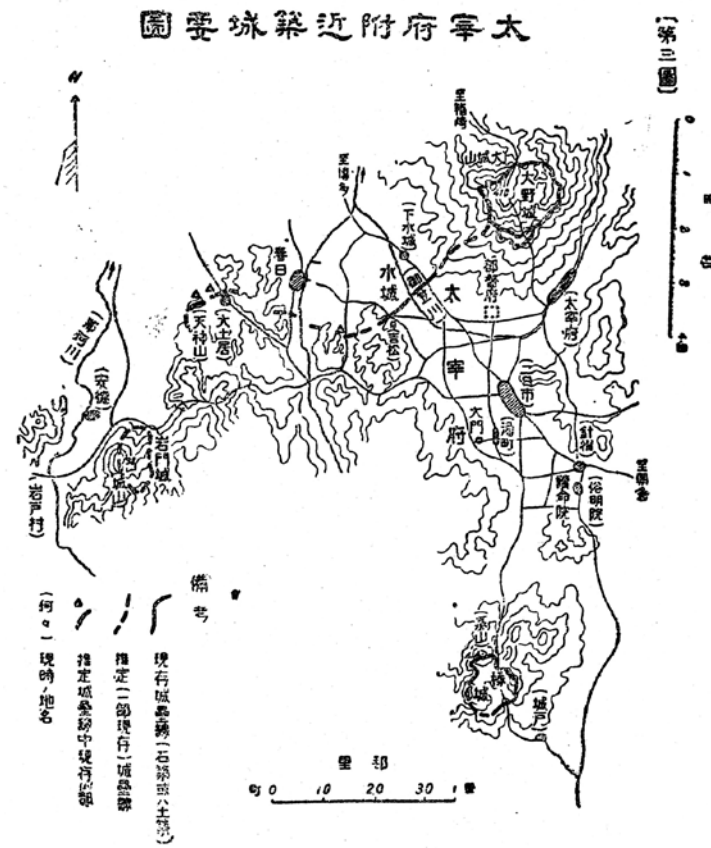


図2 大宰府付近築城要図（竹内栄喜1923）

こととなった。先述したとおり、福岡県学務部社寺兵事課史蹟名勝天然記念物保存係において県内の記念物の保護と調査が行われた。大正12年には、県嘱託島田寅次郎が担当し、その後、「福岡県史蹟名勝天然記念物調査委員会」（竹岡勝也、長沼賢海、鏡山猛、玉泉大梁、川上市太郎など）が組織され県内の史蹟や名勝、記念物の調査が進められた。これらの史蹟名勝天然記念物の調査成果として『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』が刊行された。

特に「太宰府趾の礎石」・「大野城址」（『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書 第二輯』1926）は、大宰府政庁跡の現状を実測図や大宰府の歴史的概説、大野城址の全体図とともに地区的特徴が示されるなど、史跡としての概説的側面が強い内容となっている。また、昭和7年の「大野城跡竝四王寺跡」の国史跡指定については、遺跡の基礎情報の提示や長沼賢海の調査など、『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告』が大きく関係しているものと思われる。また、「昭和七年発見四王寺経筒寫経と四王瓦」（『史蹟名勝天然記念物調査報告書 第八輯』福岡1933）は、経塚発見の経緯、史跡地における出土品の取り扱いの観点から報告されており、今日の史跡の保存管理の点からみても重要である。

4. 大規模史跡・大宰府史跡の成立

（1）成立前夜の研究

戦後、文化財保護法が昭和25年（1950）8月29日に施行され、「史蹟名勝天然記念物保存法」、「国宝保存法」等は廃止された。また、新たな文化財保護の組織として文化財保護委員会が置かれた。そして、翌年には「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」が告示された。この新たな法によって、昭和28年3月31日、大宰府跡、水城跡、大野城跡が特別史跡に指定されている（基肄城跡は昭和29年3月20日指定）。ただし、これらの史跡の指定範囲は従前のままであった。

この時期、昭和27年（1952）には、『大宰府小史』において、竹岡勝也「上代の太宰府」、長沼賢海「中世の太宰府」、橋詰武生「史伝と史話」が執筆され、大宰府の歴史が体系的に示された。また、同年、九州大学内に置かれた九州文化総合研究所によって、「大宰府の都制と文化調査会」が組織された。文献班（竹内理三）、考古班（鏡山猛）、美術班（谷口鉄雄）に分かれた学際的な総合調査であり、研究成果は、『大宰府・太宰府天満宮史料』や『観世音寺重要文化財仏像修理報告書』、『宝満山の地宝』等、幾つか出版物として報告された。こうした動きの中で、竹内理三は「大宰府政所考」において、大宰府に関わる官人の数を推定し、司所の比定を試みた。一方で、鏡山猛は、大野城跡や基肄城跡の測量や観世音寺の発掘調など、大宰府に関わる重要な遺跡の調査を主導したが、一連の研究は、昭和43年（1969）に『大宰府都城の研究』としてまとめられた。それは戦前より続く、大宰府研究の到達点と言え、大宰府史跡の発掘調査は、こうした先人達の研究を基にして始まったのである。

（2）大宰府史跡の成立

昭和38年、大野城が築造された四王寺山東南麓の大規模宅地造成計画が表面化し、古都大宰府の景観を大きく変えてしまう、大宰府史跡にとって危機的な事態となった。戦前の史跡指定の在り方が問われ、文化財保護委員会では、緑地景観も含めた遺跡全体を面的に保存する必要性が認識され始めていた。この状況下、特別史跡大宰府跡から東に位置する、学校院跡、観世音寺境内及び子院跡を新たに史跡指定し、後背の特別史跡大野城跡まで面的に繋ぐ広範囲の指定拡張が計画された。そして、昭和41年10月、大宰府史跡の指定拡張が国へ申請された。しかし同年11月、この指定拡張計画が公にされると、史跡地に住む地元の人びとは大規模な反対運動を展開した。この大宰府史跡の保存問題は、国・県・地元によって、交渉と協議が繰り返し行われ、幾度か国会でも取り上げられた。

ほぼ同じ頃、昭和40年には九州縦貫自動車道建設において、特別史跡水城跡周辺を高速道路が通過することが問題となった。埋没した遺跡の破壊や水城跡と周辺の景観が著しく損なわれることが懸念さ

れ、路線変更や工事変更について開発側の道路公団と文化庁・県とで協議が行われ、最終的には景観に配慮して水城跡付近の高架の高さを下げて調整することで決着した。

この状況の中で、大宰府史跡保存のためには、地元の理解と協力を得ることが不可欠であり、重要性を目に見える形で示すためには発掘調査が必要であった。昭和43年10月19日、大宰府政庁跡において鉄入れ式が行われ、12月3日、福岡県教育委員会によって、政庁跡中門・南門地区より大宰府史跡の発掘調査が開始された。

この大宰府史跡の発掘調査と並行しながら、指定拡張の協議が継続的に行われていたが、昭和45年9月21日、国によって大宰府史跡の指定拡張が官報告示された。特別史跡大宰府跡の追加指定をはじめ、「史跡大宰府学校院」、「史跡観世音寺境内及び子院跡」が新指定され、総面積約120haという我が国を代表する大規模史跡・大宰府史跡が誕生した。

指定拡張後の昭和47年6月、「大宰府史跡整備対策委員会」によって、大宰府史跡の現状と課題を踏まえた総合整備計画として、「大宰府歴史公園の基本構想」（試案）が提示された。その中で、大宰府史跡は「特別史跡大宰府跡」を中心とする、「特別史跡水城跡」、「特別史跡大野城跡」、「特別史跡基肄城跡」、「史跡観世音寺境内及び子院跡」、「史跡大宰府学校院跡」、「史跡筑前国分寺跡」、「史跡国分瓦窯跡」で構成され、2県（福岡・佐賀県）6市町（春日市・大野城市・筑紫野市・太宰府町〔当時〕・宇美町、佐賀県基山町）に跨るものとされた。そして、この構想を基に、「大宰府歴史公園整備前期5ヵ年計画」（昭和48年）、「大宰府史跡公園整備後期5ヵ年計画」（昭和53年）が策定され、発掘調査と環境整備事業が実施されていたのである。

5. 大宰府史跡の発掘調査の経過

（1）発掘調査の開始

大宰府史跡の計画的、体系的な発掘調査の必要性が意識され始めたのは、保存問題が表面化した昭和40年前後のことである。当時、地表に僅かに露出した礎石だけで、この大規模な史跡の全体像を語ることは不可能であり、発掘調査の重要性が認識されていたのである。

昭和43年7月、「大宰府発掘調査指導委員会」（大宰府史跡・発掘調査指導委員会）が発足し、竹内理三（委員長・国史）、鏡山猛（副委員長・考古）、坂本太郎（国史）、井上光貞（国史）、岸俊男（国史）、岡崎敬（考古）、坪井清足（考古）、浅野清（建築）、太田静六（建築）、小田富士雄（幹事、考古）が委員に委嘱された。さらに奈良国立文化財研究所より発掘を担当する技官（藤井功）が福岡県教育庁社会教育課に派遣され、調査体制が整えられた。

このような経過を経て、大宰府史跡の発掘調査は同年12月に大宰府政庁の中門・南門跡より開始された。この第1次調査では、天慶四年（941）の藤原純友の乱後にⅢ期政庁が再建されたことや、その下層には8世紀初め頃の朝堂院形式を採る礎石建物のⅡ期政庁が、さらに最下層には配置の異なるⅠ期の掘立柱建物が、それぞれ存在するなど、大きく3時期の建物変遷が明らかとなったのである。

（2）発掘調査の経過

この大宰府史跡の保存問題を契機として開始された発掘調査は、昭和47年（1972）に九州歴史資料館に移管され、計画的に実施するために第1次5ヵ年計画が立案された。そして、今日まで継続し、10次に亘る計画調査が実施されている。

初期の調査成果として、大宰府政庁跡の解明や観世音寺大房（僧房跡）の確認、水城跡において約60mの外濠を確認して追加指定の基礎資料を得たことなどが挙げられる。また、大野城跡では環境整備による礎石建物の修景を目的とした猫坂礎石群などで継続的に調査が行われた。

このような調査と整備が継続する中で、昭和53年（1978）には区画整理事業に伴う政庁前面域の発

掘調査が開始され、「大宰府条坊制」の解明が調査目的として掲げられた。未指定地の政庁前面域の不
丁地区や日吉地区において大規模な官衙施設等が確認され、政庁正面は広場で御笠川以南より朱雀大路
が始まることが明らかとなっている。また、土器や瓦、木簡等の重要な遺物が多量に出土して大宰府の
実態解明が進んだ。このほか、推定金光寺跡の調査では、観世音寺後背に広がる中世太宰府に関わる子
院跡関連施設の一端が明らかになり、大野城跡主城原地区においては礎石建物下層より官衙風の掘立柱
建物が確認されている。

昭和59年（1984）、「大宰府史跡発掘調査指導委員会」から「大宰府史跡調査研究指導委員会」へ組
織改編され、あらたに筑前国分寺塔跡の発掘調査と整備、大野城跡太宰府口城門の発掘調査等を実施し
ている。特に後者の城門構造の解明を目的とした調査では、大宰府政庁と同じく最下層Ⅰ期の掘立柱式
で唐居敷を使用した門からⅡ期礎石式の門へ変わることが明らかとなっている。さらに、政庁周辺官衙
では月山東地区や政庁後背地区の調査を実施している。また、昭和62～平成3年（1987－1991）には、
観世音寺境内を中心に調査が実施され、寺域、主要伽藍である講堂跡や塔跡の構造を明らかにしている。

平成5年(1993)には、水城跡が計画調査に掲げられた。東門地区で基底部最下層より敷粗朶を確認し、
西門地区では、3時期に亘る門の変遷が明らかにされている。さらに、蔵司丘陵西側の来木地区では、
礎石建物や金属生産に関わる遺物から工房跡が存在することが明らかとなり、匠司、「修理器杖所」の
推定地とされた。そして、平成10～12年（1998－2000）には、大宰府政庁跡正殿地区の調査が実施され、
3時期変遷を追認すると共に、最下層のⅠ期掘立柱建物がⅡ期礎石建物直前まで機能していたことが明
らかにされている。

平成15年（2003）7月の豪雨によって大野城跡が大規模に被災した。400箇所以上が被災し、災害復
旧事業に関わる発掘調査が進められた。土木工学的視点から、古代山城の特徴である土塁と石塁の構造
に関して多くの知見が得られている。そして、平成21年（2009）より政庁西側丘陵地の蔵司地区の構
造解明を目的とした計画調査を継続中である。また、平成29年（2017）より、前畑遺跡の発見を契機
として大宰府の外郭線の確認を目的とした調査が行われている。

6. 継続する研究課題と大宰府像の探究

竹内理三は、大宰府に「司」・「所」と呼ばれる19の官衙の存在を指摘し、多くは大宰府政庁周辺に置
かれたと考えた。一方、鏡山猛は「大宰府庁域」を、政庁周辺の方4町（一辺約109m）に設定し、政
庁中軸線より東西各2町とした。しかし、発掘調査では、前面域に官衙が拡がることが明らかとなり、
石松好雄は前面域を取り込んだ東西8町（約870m）、南北4町（約430m）とし、前面「逆凸形」を含
めた東西約100mの範囲を「大宰府庁域」として設定した（石松1983他）。これに対し、小田富士雄は、
大宰府条坊一辺約90m四方の条坊区画からⅡ期政庁中軸線を基準とする東西6町（約540m）、南北7
町（約630m）の範囲に新たに府庁域を設定している（小田2018）。

大宰府政庁周辺の発掘調査では、蔵司前面地区、月山東地区、後背地区、来木地区、未指定地の政庁
正面広場地区、日吉地区、不丁地区、大楠地区、広丸地区等で官衙が確認されている。このうち、四条
路北側では、ある程度地形ごとに官衙が纏まる傾向があり、政庁前面域では南北条路に関わる境界溝や
区画溝が官衙の範囲を示している。竹内理三の司所の比定は、発掘調査という考古学的方法に対して理
論的根拠と目的が与えられたが、実際、政庁周辺官衙において、記録や字名などにより司・所を比定で
きるのは政庁西側の蔵司、月山地区東の学校院のみで、その他の地区については諸説ある（小田2020他）。
現在、政庁周辺官衙の各地区の調査成果が出揃いつつある中で、考古学的方法による基礎的作業として
各地区の遺構群の構造と変遷、施設様式の検討を踏まえ、官衙総体として「府庁域」を評価していく必
要がある。

都市大宰府に関わる大宰府条坊研究が進展するのは、市街地の調査が本格化する1980年代後半以降

である。その端緒となったのは、
金田章裕の条坊論で『観世音寺
文書』による土地面積の単位が
最大八反であることを踏まえ、
そこから一辺100mの区画を復
元し、大宰府条坊の施行を第Ⅲ
期大宰府政庁の時期とした。さ
らに、金田条坊論を受け、狭川
真一は発掘調査成果を基に政庁
Ⅲ期に東西84m、南北111mの
長方形区画の条坊を復元した。

近年では、政庁Ⅱ期造営以前
に条坊区画の成立をみる井上
信正の条坊論が支持されてい
る（井上2009他）。大宰府条坊右
郭で増加した資料を基に道路や
溝の痕跡をたどりながら、一辺
90mの区画を復元している。造
営尺について、大宝大尺（1尺
＝0.35m前後）による大尺250
尺とし、和銅六年（713）条を
受けたⅡ期政庁の小尺（1尺＝
0.296m前後）とは異なり、藤
原京との尺度の共通性を強調す
る。さらに、大宰府政庁や観世
音寺など、政庁Ⅱ期以降の主要
施設がいずれも小尺を使用する
ことや、政庁中軸線の延長とな

る朱雀大路と一辺90mの大宰府条坊の方形区画とのズレから、政庁Ⅱ期成立以前の7世紀末～8世紀
初頭に政庁Ⅰ期街区（大宰府条坊）が大尺によって施工されたとみている。そして、調査状況から、左
郭12坊に対し、右郭は水城から延びる官道との関係から8坊で終わるとし、この条坊が政庁ⅡからⅢ
期に機能したと結論づけている。

この大宰府における条坊制の成立を考える時、初期の大宰府政庁を中心とする官衙の内容が重要になる
が、資料的制約があり多くを語ることはできない。ただし、Ⅱ期政庁にも機能的に繋がる8世紀前後
の正殿地区Ⅰ期遺構の状況から、遅くとも井上のいうⅠ期街区成立期には、四王寺山南麓に大宰府の中
心施設が存在したことは確かである。そのため、この時期の条坊制の導入が確かであれば、大宰府では
律令制成立期の7世紀末から8世紀初め頃、御笠川北となる政庁周辺地域で大宰府の機能的維持を図り
ながら、都市造営が進行したことになる。今後、両地区の比較研究が重要になる。

ところで、発掘調査の進展によって都市大宰府の実態が明らかになる中で、大宰府条坊跡では朱雀大
路沿いに面して大型建物が南北に並列する客館とみられる施設が確認されている。この大宰府条坊域左
郭2坊15条付近では、朱雀大路に沿って、南北に2棟が並ぶ奈良時代後半頃に造られた大型建物群が検
出されており、南北長約30m（約100尺）、南北長24m（約80尺）の二棟が並ぶ景観である。この付近
より朱雀大路沿いに臨んだ北には、政治の中心である大宰府政庁があり、その背後には軍事機能を象徴

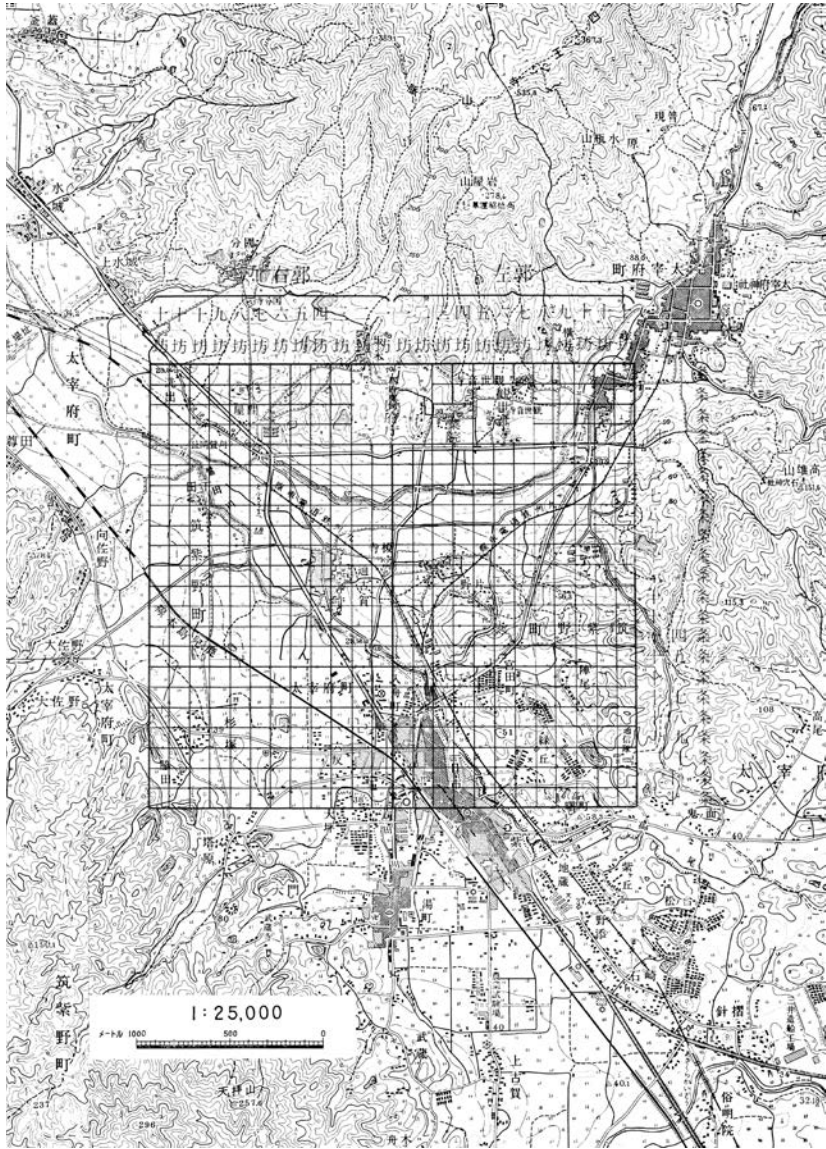


図3 鏡山猛の大宰府条坊の復元

する大野城、西の丘陵には大宰府の府庫である蔵司の倉庫群、東には宗教・文化の象徴である府の大寺・観世音寺の五重塔が聳えていた。朱雀大路から見える風景から、施設配置と空間は客館跡を含めて政治都市としての様相を帯びていたと思われる。

こうした、都市大宰府に関する研究は、水城跡や大野城跡など外郭線に軍事施設を備えた構造から大宰府都城論として展開されてきた歴史がある。特に鏡山猛や竹内栄喜が提唱して以来、大宰府都城に関する研究については、情報量が増えた今日、核心に近づきつつあると言えるが、未だ明確な結論には至っていない。

大宰府の北の外郭を構成する水城跡については、構造体としてみると平野を遮断する1.2kmの土塁とその前面に約60m幅の外濠を備える点に特徴がある。これまで、導水管の機能を持つ木樋によって内濠から外濠へ貯水したと考えられている。しかし概念的に説明はできても、貯水施設の具体的構造については今日においても不明である。かつて、長沼賢海や竹内栄喜が意識していた、濠の貯水方法や御笠川の水処理の問題を含めて、名の由来となった貯水構造の全容解明については課題である。一方、大野城跡については、城内各地区の施設の時期変遷などについても不明な点は多い。そして、城内諸施設を総体として捉えた古代山城としての機能的評価は大きな課題として残っている。

さらには、大宰府の外郭線に関わる研究も重要である。大宰府史跡の外郭の認識は、竹内栄喜の軍事防衛的視点による研究によって古くより示されたが、今日的にも大きな課題としてある。近年、確認された前畑遺跡の土塁状遺構については、あらためて大宰府都城としての研究の必要性を認識する機会を与えたと言える。土塁線や地形を改変した尾根線で構成される構造体の機能や用途についても水城跡や大野城跡、基肆城跡を含めて検討していく必要がある。

このように、戦前より、提示されてきた大宰府都城に関する研究は、今なお大きな研究課題として存在し続けているのである。

おわりに

史蹟名勝天然紀念物保存法における大正10年（1921）の大宰府史跡の指定は、当時の国家施策に関わる側面もあったが、近代日本の発展の中で史跡の保存顕彰の機運が高まりつつある中での出来事であった。大宰府史跡においては、水城跡の土塁拡幅が大きな画期となったが、当時全国的に展開されていた地域史の認識と研究の機運が背景にあったことは確かである。戦前、大宰府史跡の指定を契機として福岡県における史跡名勝天然紀念物の調査と保存が展開された。こうした史跡保存の流れは、新たに制定された文化財保護法によって特別史跡大宰府跡、水城跡、大野城跡、基肆城跡として位置づけられ、継承されていった。

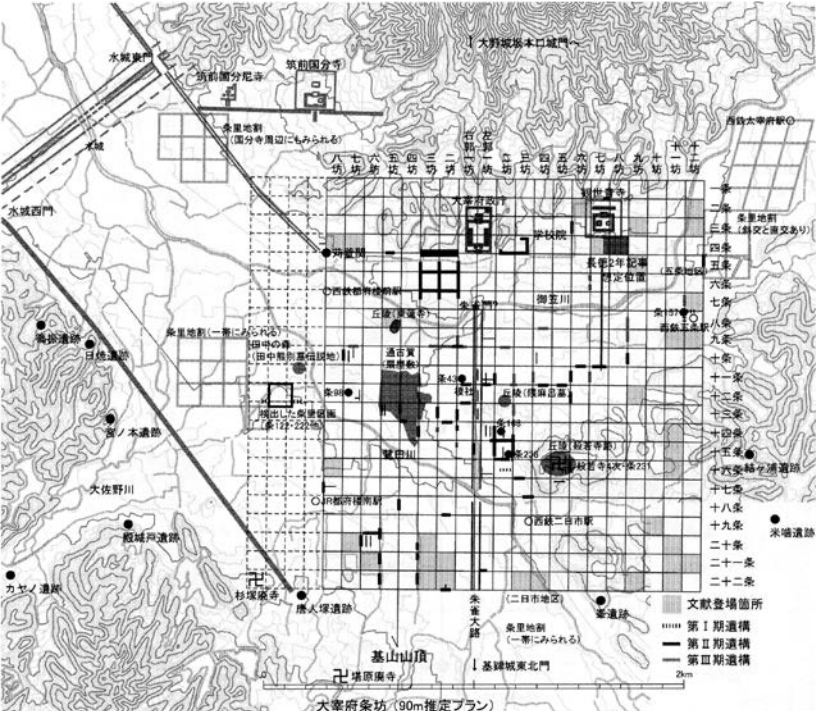


図4 近年の大宰府条坊の復元（井上2009）

これに対して、昭和30年代後半、列島規模の大規模な国土開発の中で埋蔵文化財を中心とする文化財破壊が強く意識された時代、四王寺山南麓における大規模開発に端を発した大宰府史跡の保存問題が起こった。そして、新たな方策として、この大規模な史跡を周囲の景観を含めて面的に保存していくために史跡指定拡張が検討された。この状況下で、大宰府史跡の実態を明らかにして保存していくために発掘調査が開始され、昭和45年（1970）に指定拡張が行われた。これらは、大宰府史跡保存の流れの中で起こった一連の出来事として記憶されている。

あらためてみると、大正10年（1921）の史跡指定、昭和45年（1970）の指定拡張という、大宰府史跡の歴史における大きな2つの画期によって、今日まで大宰府史跡は保存され古代以来の景観が保たれてきたことは確かである。ただ、この2つの史跡保存の取組が、ほぼ半世紀の間隔で起こっていることは決して偶然とは思われないのである。そのようにみると、史跡指定から100年を迎えた今日の大宰府史跡が何処へ向かっているのか、その歴史を振り返りつつ、現代史の中で史跡保存と引き継がれてきた研究課題を意識することで、大宰府史跡の確かな未来の姿が構築されていくのではないだろうか。

本稿は小田富士雄委員長をはじめとする大宰府史跡調査研究指導委員会の諸先生方、また大宰府史跡に関わる関係自治体の方々との平素からの意見交換によって刺激を受けてきた内容が反映されている。

参考文献 ※一部は省略

池上年1918「都府楼址の研究（上）」『考古学雑誌』第8巻7号
池上年1918「都府楼址の研究（中）」『考古学雑誌』第8巻11号
伊崎俊秋2016「大宰府史跡について（上）」『都府楼』48 古都大宰府保存協会
伊崎俊秋2017「大宰府史跡について（中）」『都府楼』49 古都大宰府保存協会
伊崎俊秋2018「大宰府史跡について（下）」『都府楼』50 古都大宰府保存協会
伊崎俊秋2018「大宰府史跡と島田寅次郎」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編、高志書院
石松好雄1983「大宰府庁域考」『大宰府古文化論叢』上巻 九州歴史資料館
井上信正2009「大宰府条坊区画の成立」『考古学ジャーナル』N o 588、ニューサイエンス社
小田和利2020「大宰府政庁周辺官衙の動向—政庁南面官衙を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』45 九州歴史資料館
小田富士雄2003「百済熊津・泗沘の都城制と倭—特に倭京～大宰府との関係について—」『古文化断叢』49 九州古文化研究会
小田富士雄2018「成立期大宰府都城調査の成果と検討」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編、高志書院
鏡山猛1937「大宰府の遺蹟と条坊」『史淵』16 九州史学会
鏡山猛1968『大宰府都城の研究』風間書房
岸俊男1983「大宰府と都城制」『大宰府古文化論叢』上巻 九州歴史資料館
九州歴史資料館編2002『大宰府政庁跡』
倉住靖彦1975「大宰府研究の現状と問題点についての予察」『日本史研究』日本史研究会
倉住靖彦1985『古代の大宰府』吉川弘文館
倉住靖彦1983「大宰府研究の一斑」『佛教藝術』146
黒板勝美1914「史蹟研究の方法」『筑紫史談』第1集
黒板勝美1914「福岡県学術研究旅行報告」『史学雑誌』25—3 史学会
狭川真一1993「大宰府の造営」『古文化談叢』31 九州古文化研究会
佐竹義文1916「史蹟名勝の保護に就いて」『筑紫史談』第11集
齋藤智志2015『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』法政大学出版局
島田寅次郎1926「大宰府の礎石」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第二輯』福岡県
島田寅次郎1926「大野城址」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第二輯』福岡県
島田寅次郎1927「四王寺の来歴と遺物の発見」『史跡名勝天然紀念物 第二集』第11
杉原敏之2007「大宰府政庁のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32 九州歴史資料館
杉原敏之2008「大宰府史跡の発掘—40年のあゆみから—」『都府楼』40号 古都大宰府保存協会
杉原敏之2009「水城の貯水施設」『水城跡—下巻—』九州歴史資料館
杉原敏之2011『遠の朝廷大宰府』新泉社
杉原敏之2018「大宰府管内における政庁域の構造と特質」『第21回古代官衙・集落研究会報告書』奈良文化財研究所研究報告第20冊、
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

高原謙次郎1914「太宰府史蹟梗概」『筑紫史談』第1集
竹内栄喜1929「太宰府を中心とする国防築城」『筑紫史談』46集
竹内理三1956「大宰府政所考」『史淵』71 九州史学会
竹内理三1972「大宰府と大陸」『古代アジアと九州』九州文化論集一
武谷水城1914「大野築城の起因及遺址」『筑紫史談』第1集
武谷水城1930「水城史観」『筑紫史談』49集
大宰府史跡調査研究指導委員会2019『大宰府史跡の現状と課題』
坪井清足2000『東と西の考古学』草風館
長沼賢海1931「大野城及四王寺遺蹟」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第六輯』福岡県
長沼賢海1932「水城の大樋の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第七輯 福岡県
中山平次郎1915「水城の研究」筑前史談会後講演集 第1集
中山平次郎1915「鴻臚館の所在に就て再び藤井学士の示教に答ふ」『史学雑誌』6巻4号
中山平次郎1915・1916「古瓦類雑考（1）～（9）」『史学雑誌』6巻4号～7巻4号
中山平次郎1926「古代の博多（1）・（2）」『考古学雑誌』16巻6号・7号
平野邦雄2004『史跡保存の軌跡その苦闘の記録』吉川弘文館
福岡県教育委員会1978『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書X XVI』
藤井功・亀井明德1977『西都大宰府』NHKブックスニ77、日本放送協会
横田賢次郎1983「大宰府政府の変遷について」『大宰府古文化論叢』上巻 九州歴史資料館
横田賢次郎2002「大宰府研究の現状と課題」『七隈史学』第4号 七隈史学会

第3章

大宰府の印章—再現文化財の製作から—

一瀬 智

はじめに

古代日本における官司の公印（官印）は、律令の定めに従い、官司が発給する公文書に押印された。西海道を統括し外交・防衛を管轄した大宰府の公印「大宰之印」は、現在は古文書に押された印影のみが伝わり、印章自体は残されていない¹⁾。福岡県立アジア文化交流センターでは、令和元年（2019）度に「大宰之印」の再現文化財²⁾製作に取り組んだ。これは九州国立博物館におけるユニバーサル・ミュージアムへの取り組みを背景にしたものであり、製作においては古代官印の姿・大きさ、鑄造間もない銅印の色、手触り感や重み、押印時の感触などが体感できる再現文化財を目指した。本稿は、その調査・研究から製作、活用について報告するものである³⁾。

1. 「大宰之印」と現存する印影

（1）大宰府の公印

古代の官印については、養老公式令の「天子神璽条」に「内印〈方三寸〉は、五位以上の位記及び諸国に下さん公文に則ち印せ。外印〈方二寸半〉は、六位以下の位記及び太政官の文案に則ち印せ。諸司の印〈方二寸二分〉は、官に上らん公文及び案・移・牒に則ち印せ。諸国の印〈方二寸〉は、京に上つる公文及び案・調物に則ち印せ。」という規定がある。さらに内印（「天皇御璽」）・外印（「太政官印」）・諸国印については大宝令に遡ってその制度が定められたことが知られ、特に諸国印については慶雲元年（大宝4・704）に鑄造されたことが『続日本紀』慶雲元年4月甲子条に認められる⁴⁾。

大宰府の公印については律令に記載がなく、諸司の規定に該当するのか、諸国に含まれるのか不明である。大宰府が発給した現在に伝わる最も古い文書に大宝4年2月11日「大宰府移」（大東急記念文庫所蔵「観世音寺大宝四年縁起」収載の案）⁵⁾があり、正文には大宰府の公印が押されていたと考えられる。以降12世紀に至るまでおよそ50通余りの大宰府発給の公式様文書が確認されているが、そのほとんどが案や写し、二次的な引用として伝わるもので、正文が現存するのはわずか3通である⁶⁾。それに「大宰府公驗」（東京国立博物館所蔵、国宝）と「観世音寺資財帳」（東京藝術大学大学美術館所蔵、国宝）を加えた5点の古文書（①～⑤）に、大宰府の公印として押された「大宰之印」の印影を確認できる（表1）。

表1 「大宰之印」が押された古文書

	年月日	文書名	所蔵	印影数
①	仁寿3年（853）2月11日	大宰府公驗（国宝、円珍関係文書）	東京国立博物館	3顆
②	延喜5年（905）10月1日	観世音寺資財帳（国宝）	東京藝術大学大学美術館	多数
③	承平7年（937）10月4日	大宰府牒（重要文化財、石清水文書）	石清水八幡宮	27顆
④	正暦3年（992）9月20日	大宰府符（重要文化財、石清水文書）	石清水八幡宮	10顆
⑤	治安4年（1024）4月15日	大宰府符（重要文化財、石清水文書）	石清水八幡宮	15顆

なお、大宰府の公印は寿永2年（1183）の争乱時に紛失し、大宰府の申請によって鎌倉時代の建久4年（1193）に「大宰府印壺面」を内匠寮に再鑄させたことが『続左丞抄』所収の建久4年11月28日「太政官符」で知られるが、その印影は伝わらず、印文等も不明である⁷⁾。

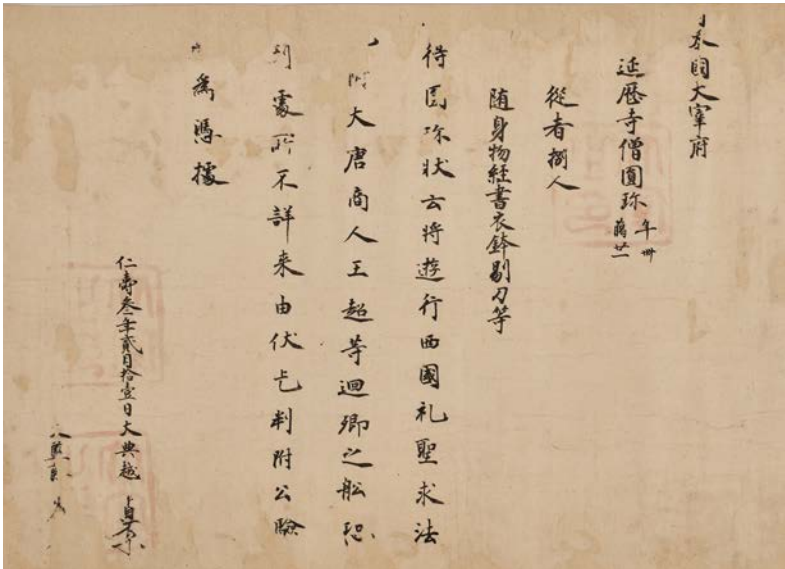


図1 ①大宰府公驗（東京国立博物館所蔵 Image：TNM Image Archives）



図4 ④大宰府符 正暦三年九月廿日（石清水八幡宮所蔵、九州歴史資料館画像提供、金井杜道撮影）

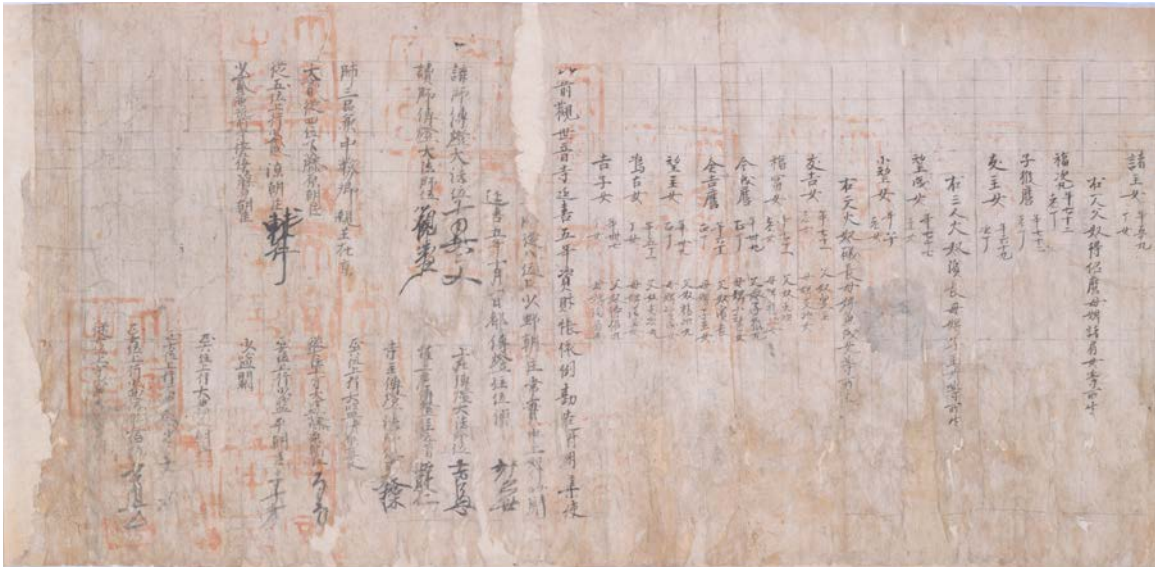


図2 ②観世音寺資財帳（下巻巻末部分、東京藝術大学大学美術館所蔵、東京藝術大学大学美術館/DNPartcom画像提供）

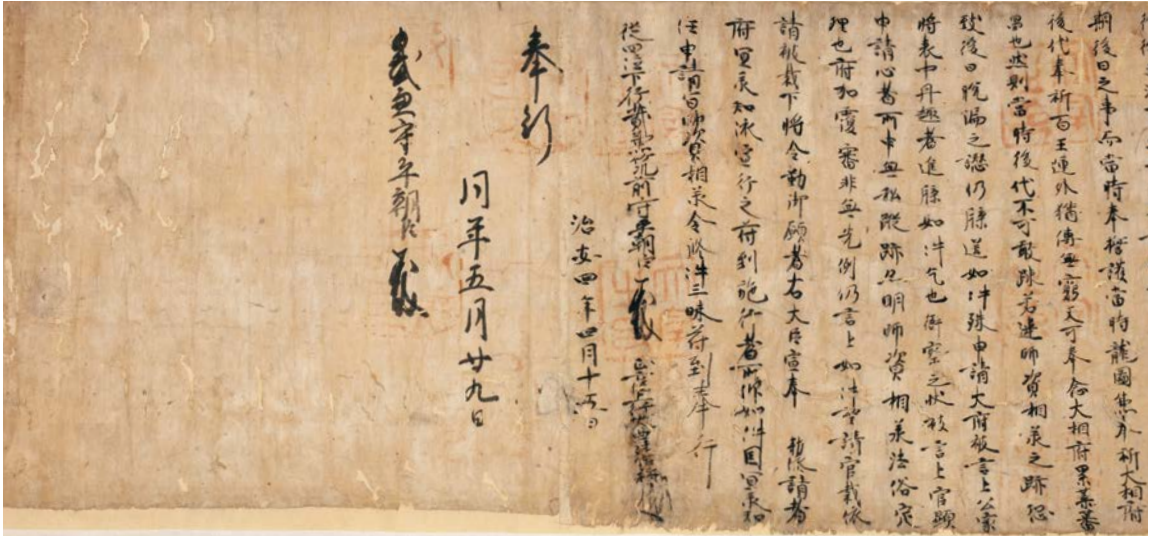


図5 ⑥大宰府符 治安四年四月十五日（石清水八幡宮所蔵、九州歴史資料館画像提供、金井杜道撮影）



図3 ③大宰府牒 承平七年十月四日（石清水八幡宮所蔵、九州歴史資料館画像提供、金井杜道撮影）

（2）「大宰之印」の印影

再現文化財の製作に先立ち、①～⑤の原文書すべてについて熟覧調査の機会を得た。各文書に押された印影はいずれも陽文の単郭方印で、内部に「大宰之印」の4字を右上・右下・左上・左下の順に配している。不明瞭な印影が多いが、養老公式令の「諸国印 方二寸二分」・「諸国印 方二寸」に照らし合わせるため、可能な範囲で印影各部を計測した。このうち郭の最も外側の縦×横、郭内側の縦×横の計測値が次の通りである（単位はcm）。

- ①2行目「僧円珍」部：（外）6.1×5.9、（内）5.5×5.6
- ①9行目年紀部：（外）6.1×5.9、（内）5.5×5.5
- ①9行目署名部：（外）6.0×5.9、（内）—
- ②巻中第12紙左下部：（外）6.0×6.0、（内）5.5×5.5
- ③24行目署名部：（外）6.1×5.9、（内）5.5×5.4
- ④冒頭「大宰府符」部：（外）—×5.7、（内）—×5.4
- ⑤7－8行頭部：（外）6.0×6.0、（内）5.4×5.3
- ⑤本文末花押部：（外）6.0×5.9、（内）5.5×5.4

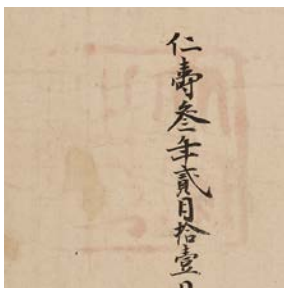
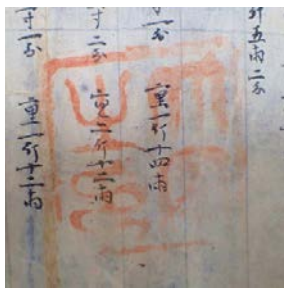
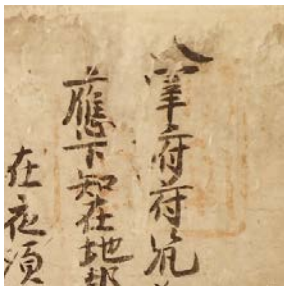
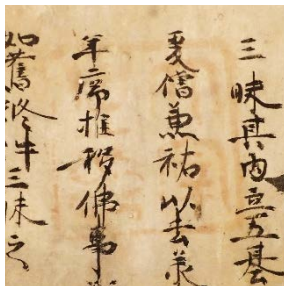
①2行目「僧円珍」部	①9行目年紀部	①9行目署名部	②巻中第12紙左下部
			
③24行目署名部	④冒頭「大宰府符」部	⑤7－8行頭部	⑤本文末花押部
			

図6 「大宰之印」の印影

（①大宰府公験：東京国立博物館所蔵 Image：TNM Image Archives、②観世音寺資財帳：東京藝術大学大学美術館所蔵、③大宰府牒・④大宰府符・⑤大宰府符：石清水八幡宮所蔵、いずれも部分、②～⑤は筆者撮影）

上記の結果から「大宰之印」の印面は、養老公式令「天子神璽条」の「諸国印 方二寸」と同様の、方2寸＝6cmであったと判断できる。郭線の太さは天地左右とも概ね0.2～0.3cmの幅があった。

次に4字の印文の字体および郭内に配置された位置を比較、検証した。字体は、各字の全体的な形状に加え、特徴的な「大」1画目起筆部（左下部）の左払い状となる曲がり、「之」左右上端部の傾き、「印」の湾曲等の細部にも共通性が認められる（図7）。各字の配置は、図8に示した箇所を、複数の印影において計測した。その結果を表2に示す。

このような字体の共通性や配置の近似から、年代に最大約170年の隔たりがある①～⑤の印影が、同一の「大宰之印」を押したものであることを確認できた。

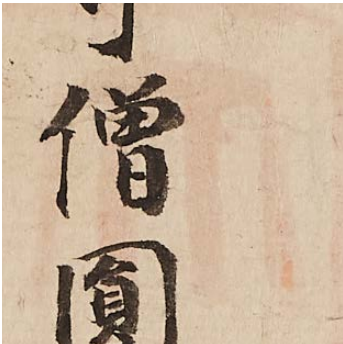
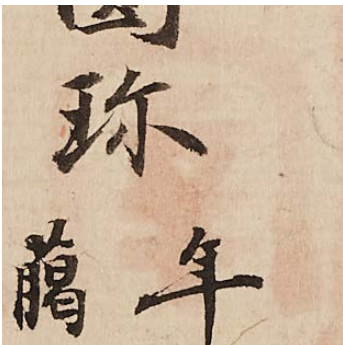
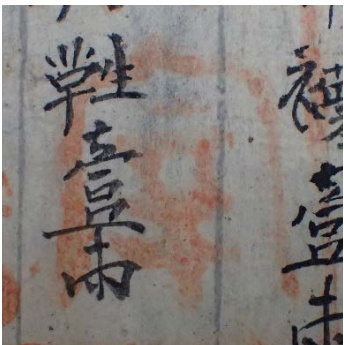
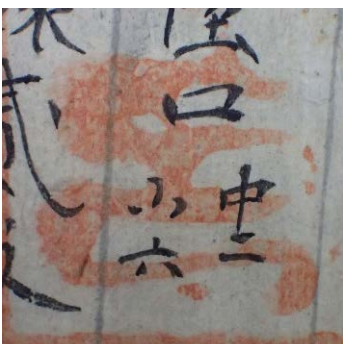
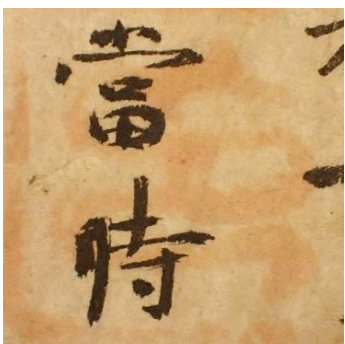
	①2行目「僧円珍」部	②巻上第5紙右上部	⑤本文23-24行頭部
大			
	①2行目「僧円珍」部	②巻中第23紙中央部	⑤本文末花押部
宰			
	①2行目「僧円珍」部	②巻中第21紙左上部	⑤本文末花押部
之			
	①2行目「僧円珍」部	②巻中第23紙中央部	⑤本文23-24行頭部
印			

図7 字体の比較

（①大宰府公験：東京国立博物館所蔵 Image：TNM Image Archives、②観世音寺資財帳：東京藝術大学大学美術館所蔵、⑤大宰府符：石清水八幡宮所蔵、いずれも部分、②⑤は筆者撮影）

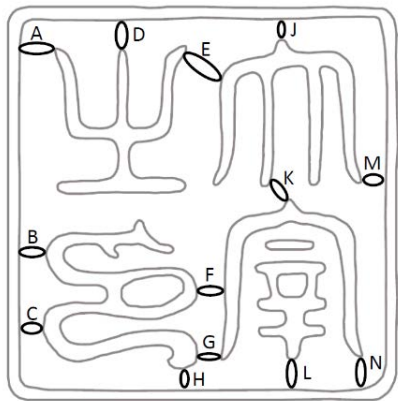


図8 印影細部の計測箇所

表2 「大宰之印」印影細部の計測値

	A	B	C	D	E	F	G	H	J	K	L	M	N
①2行目「僧円珍」部			0.3			0.35		0.2			0.25		0.3
①9行目年紀部				0.35	0.55			0.2					
①9行目署名部				0.35	0.55				0.15	0.3			
③24行目署名部	0.35	0.3	0.25	0.3	0.5								
⑤本文末花押部	0.35	0.35	0.35	0.35	0.55		0.25		0.2			0.2	
⑤7－8行頭部		0.3	0.25	0.25	0.5							0.2	

(単位はcm)

2. 「大宰之印」の鑄造時期

では、この「大宰之印」はいつ頃鑄造されたものであろうか。古代の官印は鑄造時期によって字体に違いがあり、鑄造や使用された時期が分かる他の印章との比較によって、鑄造時期を知ることができる場合がある。ここではその方法により、前章で印影の詳細を確認した「大宰之印」の鑄造時期に迫りたい⁸⁾。

「大宰之印」と印文の字体(「大」・「印」)が類似するものに次の3例がある。

- イ. 天平神護元年(765)「大和国印」印影(天平宝字5年<761>「大和国十市郡池上郷屋地売買券」東南院文書)
- ロ. 宝亀2～6年(771～775)か「東大寺印」印影(方5.9cm、年末詳<宝亀2～6年か>「東大寺司牒」正倉院文書など)
- ハ. 「法隆寺印」(方6.0cm、宝亀2年<771>官鑄か、法隆寺献納宝物、東京国立博物館所蔵、重要文化財)

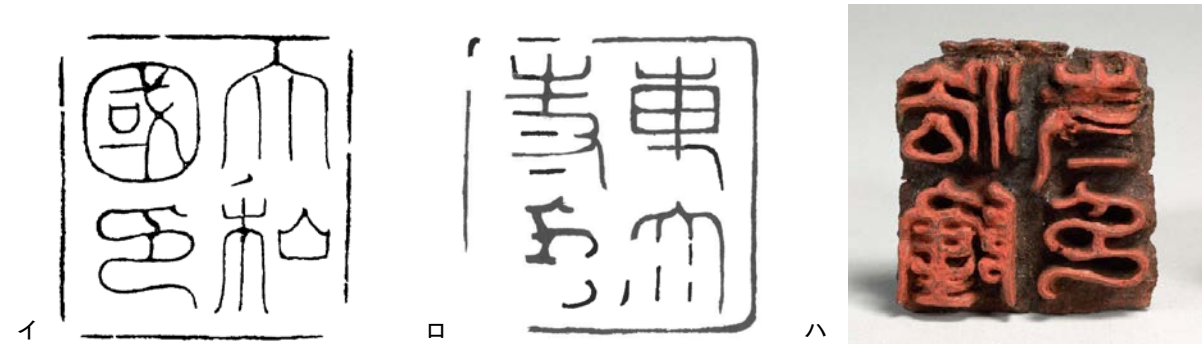


図9 字体が類似する例(イ「大和国印」印影、ロ「東大寺印」印影、ハ「法隆寺印」印面)

(イは平川南1999 図8、ロは国立歴史民俗博物館1996「正倉院文書印影(合成)図版」より転載、ハはColBase (https://colbase.nich.go.jp) より)

イは天平神護元年(765)の文書に押された「大和国印」印影、ロは宝亀2～6年(771～775)と推定される文書に押された「東大寺印」印影、ハは法隆寺献納宝物の伝世印「法隆寺印」の印面である。この3例に見える「大」「印」の字体に、「大宰之印」印影との類似を確認できる。このうち「東大寺印」と「法隆寺印」については、『続日本紀』宝亀2年(771)8月己卯条に官鑄・頒布の記事がある「大安・薬師・東大・興福・新薬・元興・法隆・弘福・四天王・崇福・法花・西隆等」の十数か寺の印に該当すると考えられる⁹⁾。

それと対照的に、「大宰之印」と字体や時期を異にする印文として次の4例を示す。

- A. 大宝4年(704)「筑前国印」印影(方6.0cm、大宝2年「筑前国嶋郡川辺里戸籍」正倉院文書)
- B. 天平2年(730)「大倭国印」印影(方6.0cm、天平2年「大倭国正税帳」正倉院文書)
- C. 天平17年(745)「大蔵之印」印影(方6.6cm、天平17年「大蔵省移」正倉院文書など)
- D. 天平17年(745)「宮内之印」印影(6.6×6.5cm、天平17年「園地司解」正倉院文書など)

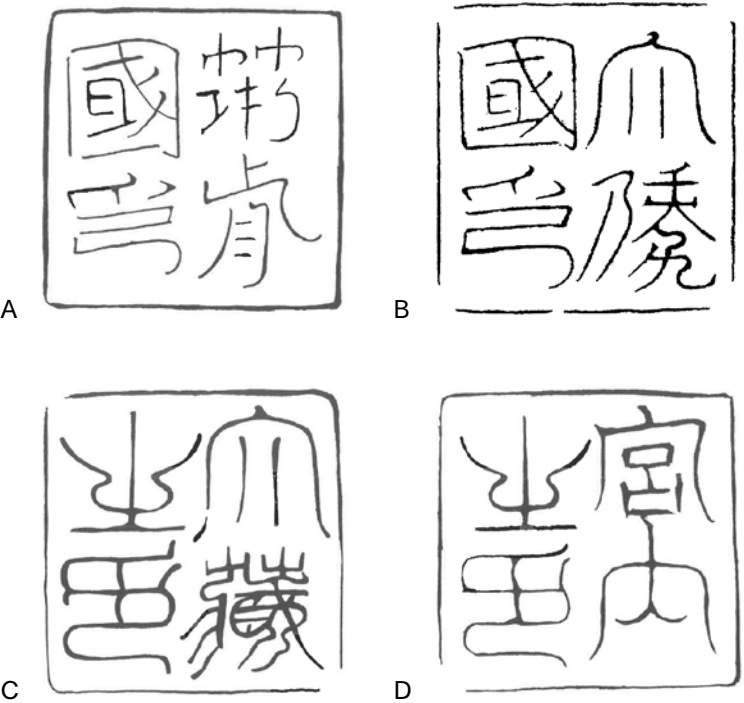


図10 字体を異にする例
(A「筑前国印」、B「大倭国印」、
C「大蔵之印」、D「宮内之印」)
(A・C・Dは国立歴史民俗博物館1996「正倉院文書印影(合成)図版」より、Bは平川南1999図8より転載)

Aは大宝4年(704)に鑄造された諸国印のうちのひとつ。Bもそれに準じたものだが、天平宝字元年(757)に「大倭国」を「大和国」に改めたのを機に、イに改鑄された。従ってそれ以前に鑄造・使用された国印にAやBのような字体が用いられた。印文は「大宰之印」と「大」「印」が共通するが、字体の違いは明瞭である。C・Dは中央官司の八省のうち、大蔵省と宮内省の印。先んじて作製された中務省を除く7省には、養老3年(719)12月に印が支給されている¹⁰⁾。「大宰之印」と印文を比較すると、湾曲する「印」をはじめ書体は近いものの、「大」「之」やウ冠などの字体には大きな違いがあるといえよう。

以上から、①～⑤に押された「大宰之印」は、イ～ハの類似例に近い天平宝字～宝亀2年(757～771)ごろに鑄造されたもの、あるいはその字体を継承して①が作成された9世紀半ばまでに改鑄されたものと考えられる。

平川南氏はこの天平宝字期頃における官印、特に国印・郡印の改鑄について、次のような整理と重要な指摘をしている。すなわち、国印は大宝4年に初鑄され、方2寸の篆書体に印の文字は「𠂔」を用い

た（A・Bなど）が、天平宝字期頃に「大和国印」（イ）のように篆書体ではあるが字体が若干変化し、印の文字も「𠂔」を用いはじめ、以降は基本的に踏襲された。郡印は国印にならい、方2寸以下の規格のもと篆書体と印の文字「𠂔」で铸造されたが、国印の変換点である天平宝字期頃に突如として楷書体に、印の文字は通常の書体「印」に改められた。それが9世紀以降には再び国印にならう字体に変じた。この天平宝字期頃の変化は、天平勝宝～天平宝字年間（750～765）に絶大な権力を握り、中国にならった諸改革を実施した藤原仲麻呂が、中国において皇帝の書体とされた篆書体を専ら八省印や諸国印に用いるものとし、郡印は中国で臣下の用いる隷書体から発展した楷書体に限定することで、地方社会における国・郡の区別を明確に識別させた施策であったとする（平川南1999）。

前述のように、大宰府が発給した公式様文書は大宝4年には認められ、8世紀前半には大宰府の公印が存在した可能性がある。それについて論じる準備はないが、①～⑤に押された「大宰之印」（あるいは規格・字体を同じくする前身の印）は天平宝字～宝亀2年ごろの铸造と考えられ、平川氏が指摘する国印・郡印に変化をもたらした政治的な影響が、大宰府の公印にも及んだ可能性が想定される¹¹⁾。

3. 「大宰之印」の上部構造

上記のように①～⑤に押された「大宰之印」は、8世紀半ばごろに铸造された、あるいはそれを継承した印章と考えられるが、その上部構造（印台・鈕）については、それを直接的に示す資料は無く、周辺資料から想定するほかない。

8世紀に遡る官铸印で上部構造が知られる貴重な例に、大宰府にゆかりのある「御笠団印」「遠賀団印」（いずれも東京国立博物館所蔵、重要文化財）、および「大宰之印」と字体に共通性があり铸造時期も近いと考えられる伝世印「法隆寺印」（ハ）がある（図11）。3印の法量・形状等は次の通りである（単位はcm）¹²⁾。



図11 「御笠団印」（上）・「遠賀団印」（中）・「法隆寺印」（下）

（写真は全てColBase〈<https://colbase.nich.go.jp>〉より、図面は国立歴史民俗博物館1999「日本古代出土・伝世印集成図面」より転載）

- ・「御笠団印」：印面4.3×4.3、印台高0.9、総高5.2、孤鈕・無孔、印面天側の鈕頸部に「⊥」陽刻
 - ・「遠賀団印」：印面4.2×4.1、印台高1.0、総高5.2、孤鈕・無孔、印面天側の鈕頸部に「⊥」陽刻
 - ・「法隆寺印」：印面6.0×6.0、印台高0.9、総高7.3、弧鈕・無孔、印面天側の鈕頸部に「⊥」陽刻
- 法量について、軍団印は郡印（印面方約4.5cm）と同格かやや小さい規格のようだが、形状については3印とも高さ約1cmの印台を持ち、鈕頭部が扇形となる孤鈕で、鈕に孔が無い。さらに印面天側の鈕頸部に「⊥」字の陽刻を持つ点も共通する。

これらを参考に再現文化財「大宰之印」は、特に印面法量も同じである「法隆寺印」をベースとして、「印面方6cm、印台高1cm、総高7.3cm、孤鈕・無孔、印面天側の鈕頸部に「⊥」の陽刻がある」上部構造の印章として製作することとした（図12）。

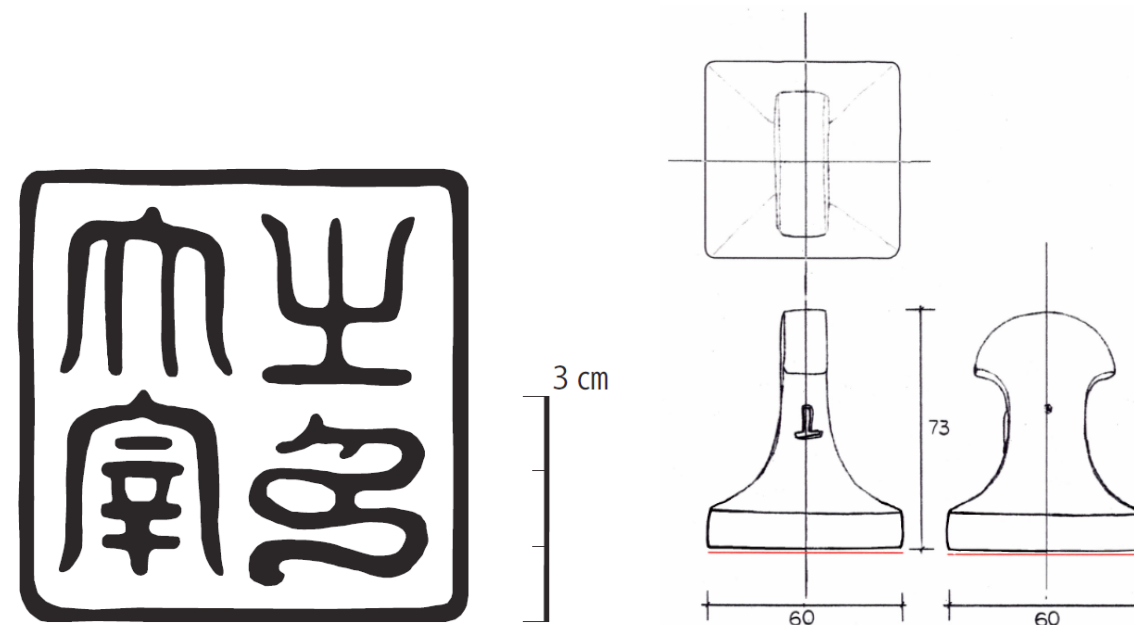


図12 「大宰之印」の復元図（左：印面、右：上部構造）

4. 再現文化財の製作

以上のような検討と復元図を基に、再現文化財の製作作業に取り掛かった。以下の製作工程については株式会社芸匠に業務委託した。

（1）铸型作製

- 1) 図面をもとに木型の原型を作製（図13）。
- 2) 铸造時の収縮を考慮し、木型原型にさらに樹脂を肉付けして铸造用原型を作製。
- 3) 铸造用原型をシリコンで型取りし、蠟を流し込んで蠟の原型を作製。
- 4) 蠟の原型に铸物砂を被せて砂型を作り、焼いて蠟を溶かし出し、さらに焼き固めて铸型を作製。



図13 木型の原型

(2) 鋳造・仕上げ

- 1) 焼き固めた鋳型が冷め切らないうちに、溶かした金属材を鋳型に流し込む。金属材の成分比は銅85%：鉛5%：錫5%：亜鉛5%¹³⁾。
- 2) 自然冷却後、鋳型を割って銅印を取り出す(図14)。
- 3) 湯口・鋳ばりを除去し、印面を調整。



図14 鋳造直後の状態

(3) 完成品

今回の製作では3顆の銅印「大宰之印」を鋳造した。このうち2顆(正・副)は煮色仕上げ(水に胆

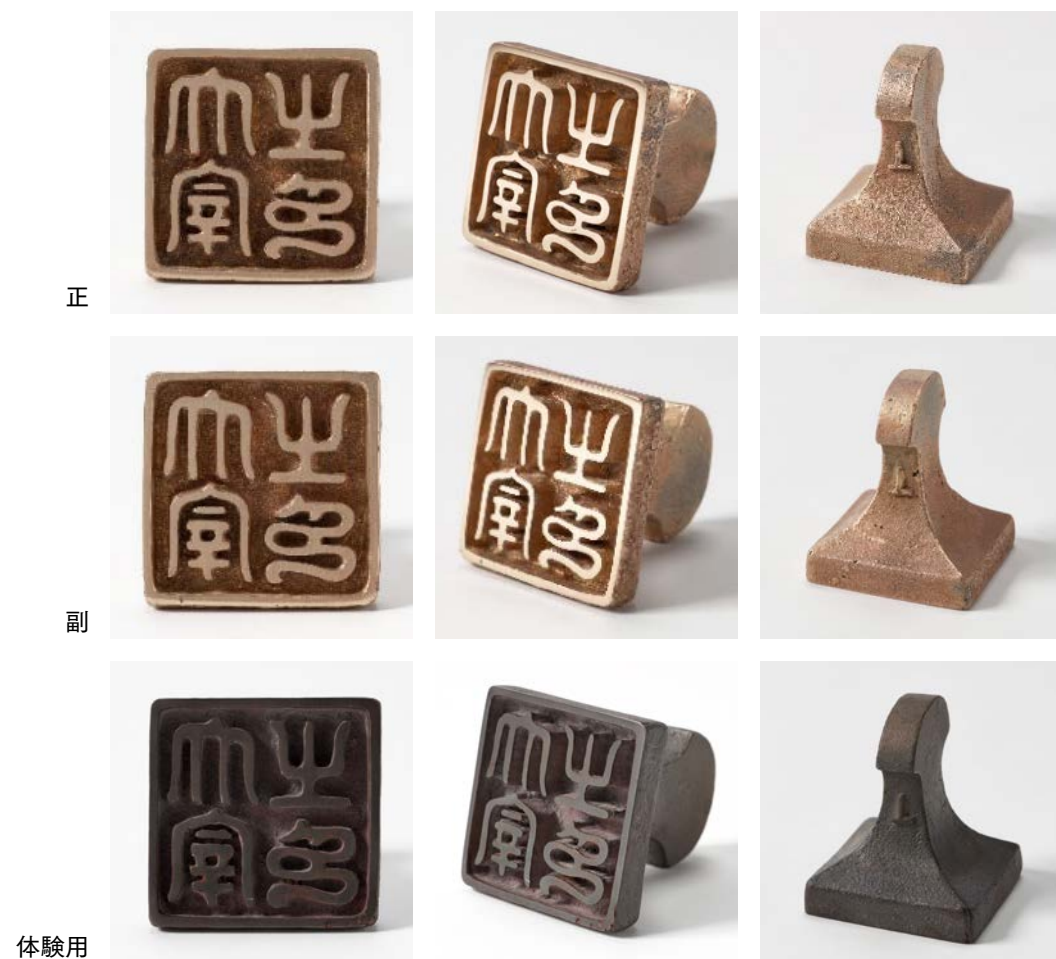


図15 「大宰之印」完成品

礬(硫酸銅)と緑青(炭酸銅・酢酸銅)を加えて煮溶かした溶液で製品を煮込み、表面に酸化皮膜を作って耐候性をつける)など表面保護や古色仕上げのための特別な仕上げ等は施さなかった。残る1顆は体験用とし、使用による変色等を目立たせない目的から、煮色仕上げを施した。3顆それぞれの法量・重量は次の通りである。

- ・再現文化財(正)(図15上段): 印面6.1×6.1cm、総高7.2cm、重量588g
- ・再現文化財(副)(図15中段): 印面6.0×6.0cm、総高7.2cm、重量588g
- ・体験用(図15下段): 印面6.0×6.0cm、総高7.1cm、重量585g

5. 「大宰之印」の活用

製作した3顆の「大宰之印」は、令和2年(2020)度より九州国立博物館の展示や教育普及活動において活用した。展示では特集展示「筑紫の神と仏」(5月19日～8月30日)、および文化交流展示における「ならべてわかる本物のひみつ」展(9月8日～11月23日)に出陳した。特に「ならべてわかる本物のひみつ」展では、来館者に再現文化財の色味や質感を直に体感いただけるよう露出展示とし¹⁴⁾、また展示に合わせて点字付き解説リーフレット「ユニバーサル・ガイドブック」(B4判二つ折り)を作製し、展示室内で配布した(図16・18)。ガイドブックの内容や言葉遣いは、「大宰之印」がどのようなもので、どのように使われたのか、小中学生や視覚障害者にも伝わりやすく難解にならないように心がけた。また原寸大で載せた復元印影には、触察ができるように凹凸加工を施した。

教育普及活動では、体験用の「大宰之印」を「きゅーはくキャラバン」(出前授業)に持参し、実際



図16 「ならべてわかる本物のひみつ」展における展示状況



図17 出前授業での押印体験(左)と体験用「大宰之印」の印影(右)

に生徒に押印を体験してもらった（図17）。文書に押印するという使用方は現代とも共通する一方、大きさや重さ、質感などには身近な印章との違いが強く実感されたと思われる。今後も館内外における多様な教育普及プログラムで積極的に活用することで、古代東アジアの文書行政、印章文化、古代の大宰府について考えるきっかけや、文化財や博物館への親しみにつなげたい。

おわりに

関係資料に乏しいことから、推測を重ねた復元であり、また何より筆者が古代史に不慣れであることから、考察が不十分な点や初歩的な誤りも多いと思われる。だが、大宰府の研究史において、意外にも大宰府自身の公印について取り上げた研究はこれまで無い。平川氏や田中氏による8世紀の中央官司印や国郡印をめぐる議論と併せて考えると、「大宰之印」は大宰府という官司の位置づけを考える上でも大変興味深い素材と言える。今回の復元が議論のきっかけとなり、大宰府研究がさらに厚みを増す一助



★左は、あるハンコの印影です。四角で囲まれた中に4つの文字が記されています。何と読むかわかりますか？

★正解は、右上・右下・左上・左下の順に読み、「大宰之印」（だざいのいん）と記されています。今から1300年から900年前の奈良時代から平安時代に、九州を治めるために設けられた役所「大宰府」の公印として使われたハンコです。「大宰府」は今の福岡県太宰府市にありました。

★「大宰之印」は実物が残っていません。印影だけが現存する大宰府の古文書5点に伝わります。九州国立博物館では、その印影やほかの古代の印を参考に、再現文化財（※）の「大宰之印」を復元製作しました。

※ 実物と同様の材料や技法で復元した文化財

★これが「大宰之印」だ!!

大きさ：印面タテ6cm×ヨコ6cm
持ち手部分の高さ7cm

重さ：約590g
（500mlペットボトルが500g）

材料：銅（わずかに鉛や錫を含む）

作り方：鑄造（ちゅうぞう）。土で作った鑄型（いがた）に溶かした銅を流し込みます。冷めて固まったら、鑄型を割って取り出します。

色：現在まで残る古代の印は、長く伝わる間に表面が黒く変色していますが、鑄造して間もない姿を再現した「大宰之印」は金色に輝いています。

★どのように使われた？

実物の「大宰之印」は、大宰府の長官が管理し、大宰府が発行した公文書などに押されました。なかには文書の全面にたくさん押されたものもあります。それは、文書に書かれた内容の証明や、改ざん防止のためと考えられています。

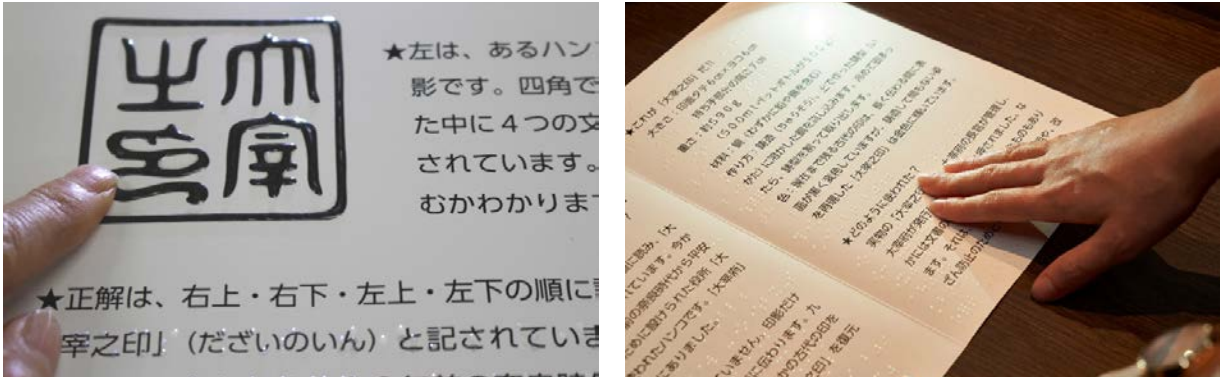


図18 ユニバーサル・ガイドブック「銅印「大宰之印」（再現文化財）」

になれば幸いである。

再現文化財の製作に係る印影調査では、石清水八幡宮の西中道禰宜、田中博志権禰宜、東京藝術大学大学美術館の黒川廣子教授、東京国立博物館の丸山猶計登録室・貸与特別観覧室長に大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 大宰府のみならず、古代に鑄造された中央官司の印や国印そのものは一点も現存しない。官印としては、郡印・倉印・軍団印・郷印の伝世品や出土品があるほか、官鑄の可能性のある寺社印の伝世品がある。
- 2) 九州国立博物館では、文化財の複製品（レプリカ）のうち、原品と同様の材料や技法で製作した資料・作品を「再現文化財」としている。
- 3) 再現文化財「大宰之印」の製作と本稿の執筆にあたっては国立歴史民俗博物館1999と、特に同報告所収の福島正樹1999に多くの教示を得た。
- 4) 詳細は仁藤敦史「公印鑄造官司の変遷について 鍛冶司・典鑄司・内匠寮」（国立歴史民俗博物館1999）、福島正樹1999などに整理されている。
- 5) 竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料 巻1』42頁（太宰府天満宮、1964年）。『太宰府市史 通史編1』（太宰府市、2005年）巻頭図版26にカラー図版の掲載がある。
- 6) 太宰府天満宮文化研究所編『大宰府・太宰府天満宮文書展』（太宰府天満宮、1981年）。
- 7) 『新訂増補国史大系 第27巻』28～29頁（新装版第2刷、吉川弘文館、2003年）。本官符には「大宰府印卷面料」（この「大宰府印」が印文を記したものか、あるいは「大宰府の印」と読むのかは議論を要する。後述の「大宰府印字様」も同様）として内匠寮に支給された「熟銅式斤」「白鑄参両」「荒炭式斛」「油式合」「臈六両」「細布伍尺」「伊与砥半顆」など原材料等の記載もあり興味深い（『延喜式』内匠寮には、内印・外印・諸司印・諸国印の各一面料の規定がある）。また同時に大蔵書博士に対し「大宰府印字様」についての勘申が命じられている。なお松平定信編『集古十種』「印章部」には、「古摸本」から摸写された字体を異にする2顆の「太宰府印」印影が収載されるが、根拠が不明瞭であり本稿では考察の対象としない。
このほか関係する事項として、藤原広嗣の乱の影響で天平14年（742）に大宰府が廃止され翌年12月に設置された「鎮西府」が、同16年1月に「鎮西府印一面」を支給されている（『続日本紀』天平16年正月辛酉条）。その翌17年6月には大宰府が復置され、8月に「大宰府管内諸司」に印12面が支給されている（『続日本紀』天平17年6月辛卯条・8月己丑条）。
- 8) 以下の比較検討においては、福島正樹1999の表1－1～1－3「諸国印印影一覧」、国立歴史民俗博物館1996の「正倉院文書印影（合成）図版」、木内武男1964の110～122頁図版を参照した。
- 9) 田中史生「「東大寺印」と「造東寺印」正倉院文書の分析から」（国立歴史民俗博物館1999）
- 10) 『続日本紀』養老3年（719）12月乙酉条。鎌田元一「日本古代の官印―八世紀の諸国印を中心として―」（同『律令公民制の研究』塙書房、2001年）。
- 11) 田中史生氏は、平川氏の指摘を踏まえて、さらに官印の印文における「之印」の採用について検討し、8世紀前半の律令国家は、官印の字体と京官に限定した「之印」の採用によって、八省以上とその下の官司を区別するとともに、京官と外官を区別することも意図していたが、8世紀半ばの仲麻呂政権下では、その関心が国・郡の区別を表現するものとなり、その後、郡印の字体が再び国印に近づいたことで、八省以上の印に採用されていた唐の篆書体に近い字体が地方の官印にも拡大し、官印における京官と外官の区別も曖昧化していったとされる（田中史生「日本古代官印と隋唐官印 正倉院に伝わる印影資料との比較を中心に」〈国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第194集〔共同研究〕古代における文字文化形成過程の総合的研究』、2015年）。8世紀前半の大宰府の公印については不詳だが、8世紀半ばにおいて外官である大宰府の公印に唐の篆書体に近い字体の「大宰之印」が採用されたことは、田中氏の論にも概ね合致すると考える。
- 12) 国立歴史民俗博物館1999「日本古代出土・伝世印集成一覧」
- 13) 古代銅印の素材については、永嶋正春「非破壊手法による銅印の科学的研究」（国立歴史民俗博物館1999）による、銅に次いで鉛・ヒ素・錫を主成分とするという分析結果があるが、今回の製作においては工期と鑄造の安定性の問題から本文に記したような成分比となった。
- 14) 本展示は当初、実物作品とレプリカや再現文化財を並べて展示し、そのメリットを広く活用するハンズオン展示として企画されたが、新型コロナウイルス感染症対策のため展示作品のハンズオンは控えることとなった。再現文化財「大宰之印」の展示も同様の対応となったが、本文に述べた理由により露出展示とした。このほか会場では、展示作品の基本情報・解説のキャプションを視覚障害者にも読み取りやすい点字付き・白黒反転・UDフォント仕様とし、車椅子利用者にも見やすい高さや角度のキャプション台を設置するなど、ハンズオンが困難な状況下でもユニバーサル・ミュージアムに向けて取り組んだ意義深い展示であった。なお点字付きのキャプション類は定期的にアルコール消毒をおこなったことを付記しておく。

参考文献

木内武男1964『日本の古印』二玄社

国立歴史民俗博物館1996『「非文献資料の基礎的研究—古印—」報告書 日本古代印集成』

国立歴史民俗博物館1999『国立歴史民俗博物館研究報告第79集 日本古代印の基礎的研究』

平川南1999「古代郡印論」『国立歴史民俗博物館研究報告第79集 日本古代印の基礎的研究』

福島正樹1999「古代国印の復原と課題 信濃国印の復原制作を通して」『国立歴史民俗博物館研究報告第79集 日本古代印の基礎的研究』

久米邦夫2016『はんこ ものと人間の文化史178』法政大学出版局